Anti Nightmare Anti

桐月那蕹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｎｔｉ　Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ａｎｔｉ

【Ｎコード】
Ｎ１２５６Ｏ

【作者名】
桐月那薙

【あらすじ】
異能者——それは人ならざる人。そんな認識が広がった世界。異能者達が暮らす街「真織市」に引っ越してきた少年、萩島隆道が過ごす、非日常が日常の物語。それはシリアスだったりコメディだったりくだらないものだったり。

いつか見る夢――Ａ　ｐｒｏｌｏｇｕｅ

人から生まれた人ならざる存在――異能者――
彼らは人の姿をしていながら、人には無い特別な力がある。文字通り人とは異なる能力だ。
それゆえに多くの人々は彼らを排除し、受け入れることはないが、私はコレを人の進化、あるべき場所に近づいた証と捉える。
ただ、私もまだ人であるがため、彼らの真意を明確に理解しているわけではない。
だが、人々よ彼らを恐れることはない。なぜなら彼らは未来の私達の姿なのだから。

異能者論文「Ｉｃｈに繋がる者達」序文　　著・伊頭巻　貴春

／夢に残る傷の跡

真夜中。
濃い鉄錆のような臭いで目が覚めた。
むせ返るような熱気と臭気。静寂が包む暗闇の中、確かに見た夜より深い黒。
馬乗りにまたがった少女がそこにいたのだ。
「兄さん、まだ」
昔から何かを求めていた甘い声。今は一段と強く、そしてはっきりとした目的をもって求めていた。
少女の指先が左胸をなぞる。

どれだけ手足を動かそうとしても完全に固定されたようにぴくりともしない。
世界ノ全テが彼女のモノだった。
そこで始めて気がついた。この部屋を包む臭気の正体に。
少女が左手に持つソレ。少女から取り出された××。
そして少女は求めるモノの鼓動を右手で感じていた。
「さぁ、いただきます——」

夢の中で夢をみる。
黒い星が浮かぶ空。
朝と夜同時に存在しているその世界。
草原の海で寝転ぶ少女。
あれから長い月日がたった。
彼女は変わらず今もここにいる。
夢に巣くい、心を求め、異能者となりはてた萩島隆道（はぎしまたかみち）の世界に住み着き微笑んでいた。

いつか見る夢——Ａ　ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

初投稿宜しくお願いします。
そのためいたならないところが多々あると思いますが、生暖かい目で見守りつつ、ご意見ご感想を頂けると幸いです。

やって来た日――The other day

「はぁ……」
思わず深いため息が口からあふれ出した。
先ほど学園に転入の手続きを済ませ、新居となったマンションの部屋へ帰ってきた瞬間、まるで都市伝説に出てくるような妖精さんや小人さんが働いたかのように部屋が綺麗に掃除に整理、整頓までされていたのだ。ついでにテーブルの上に夕食。この現実に、もうため息以外出てこない。
しかし、犯人は分かっている。断じて小人や妖精さんなどではない。
昨日この街へやってきて、割り当てられたこのマンションで挨拶を交わしたお隣さん。このお隣さん、実はストーカーにクラスチェンジしていたのだ。その事実を知ったのは今朝。
昨日の今日でお隣さんにどんな心変わりがあったのか不明だが、いつのまにか合鍵を作くられ、部屋に潜入されたのは困った。
私物で持ち込んだ鞄の中味が全て出され、衣類は備え付けタンスに、洗面用具は洗面所、私物――（ゲームとかエロ本とか）はテーブルに綺麗に置かれていた。そしてここまで綺麗に整理整頓したと言うことは、部屋の隅々まで見て回ったと言うことだろう。
「盗聴器でも仕掛けられてるんじゃないだろうな……」
とりたてて覗かれて困る日常を送るつもりは無いため、目くじらたてて騒ぐこともないが、新天地で心機一転と気合を入れたばかりなため、出鼻をくじかれた感はある。
この街『真織市』は異能者を集めた一種の隔離都市だ。
異能者の持つ異能は千差万別でり、異能を持たない者から見ればその力はまったくの未知。そのため法に当てはめて取り締まることは難しい。そして人種間の問題も発展し、どうしても一般人と異能

者の溝に対応できないでいる政府は、ついに異能者を一箇所に集め同類は同類同士で問題を解決させようとした。
そのため一つの市を丸々市壁で囲い、異能者達を押し込め、さらに日々日本で発見される異能者もここに送られてくる。『さながら異能者の国だ』とはここに来る前に師匠に聞いた感想だ。
そんな理由もあり、この街はそれほど古い歴史を持っているわけでもなく、法なんてものもアバウト。刑も、死刑なんていうことがザラだ。曰く異能者には人権が無い。
そもそも警察なんてものもなく、異能者の自警団が編成され街の治安を維持しているくらいだ。ここはどんな中世時代の街だと言いたくなる。そのため、個人の問題は個人で好きに解決した方がいいと、ここに入市する際言われたぐらいだ。明確な法があるとすれば「この街を無許可で出ようとした場合死刑」というものくらいだろう。
話しは戻るが、このストーカー事件を誰かに話したところで、自力で解決しろと言われるのが目に見えているため、あわてず騒がず対処するのが正解だろう。大体犯人分かってるんだから最悪力ずくで解決することになるだろう。
しかし唯一の救いは、そのストーカーであるお隣さんが可愛い事だろう。挨拶に行った際流暢な日本語をしゃべっていたが、金髪で紺碧の瞳とくれば、異国の血が多く混じっていることがありありと分かるその容姿と巨乳。とても目の保養になった。ついでに料理が旨い――（↑躊躇も遠慮も毒見も無く食べている）。それによく考えると、掃除もしてくれるし、盗まれて困るモノも無いし、逆にここまでくるとこのまま好きにやらせても便利でいいかなと思い始めてきた。
まぁ、明後日から学園に通うわけだし、彼女がどこに通っているのか分からないが、人ごみの中で大胆なことも出来ないだろうから、このまま放置に決定だな――と気持ちを切り替えた時、

ドン！　と部屋が大きく揺れた。

一瞬地震か――と考えたが外から轟音が耳に届いたことで、思考が異能者同士の喧嘩か？　と切り替わる。

さすが異能者達が暮らす街だ、この場所からも見えるかな？　と野次馬根性を出して窓に近づいて外を見てみることにした。

空が暗くなり始めている中で、喧嘩をしている人を見つける目を持っていない。諦めて窓から離れようとした瞬間、空から落ちてくる影――それは人の形にあらず。

この部屋はマンションの六階。その場所めがけて翼をもった[redacted]が突っ込んできた――

この後、紆余曲折があった。

過ぎた時間はたった一日でありながら、お隣のストーカーさんと仲良くなったり、しなくていい喧嘩をしたり、この街の秘密の一端を見ちゃった気がして全力で見なかったことにしたり、しなくちゃいけない喧嘩をしたり、崩壊した部屋の変わりを探す際お隣さんとひと悶着があったりと、さまざまな出来事が濃縮されていた。

ただ、この事件を通して思ったことは、これからこの街で暮らす萩島隆道の生活は、平穏なものにならないだろうなということだった。

黒い星が浮かぶ空。

朝と夜同時に存在しているその世界。

草原の海で寝転ぶ少女。
彼女の傍らには翼をもった者が居座っていた。

これからの光景――Episode start

ずっと続いていた習慣で、朝同じ時間に意識がゆっくりと目覚め始めた。しかし、身体のほうはなかなか起きてくれなかった。疲れがまだまだ残っていたらしく瞼がが重く開かない。
このまま、まどろみの中で二度寝をしてしまいそうになった時、鼻をくすぐる腹が減りそうなにおいが漂ってきた。
おかしい、俺には朝食を作ってくれる気の効いた妹とか幼馴染などとは無縁だったはず。むしろ俺がこき使われる側だった気が……いや、そんなことはどうでもいい。食事のにおいにつられて胃が活動し始め、それに連動して身体もしゃっきりと目覚めていく。我ながら現金と言わざるおえない。
「あっ、起きられました？」
「……なにやってる」
目を開けた瞬間、目の前に見覚えのある女の顔があったことに内心ビビッた。
彼女は元お隣さんだ。不本意ながら昨晩から同居人になってしまったが。
「えーっと、おはようのキスを」
顔を赤らめて続きをしようと、唇を寄せてくる。が、当然両手ですばやくブロック。元ストーカーだけあって、一度許すと後が怖いから、絶対に彼女とはそーゆー関係だけはならないと心に誓っている。
「はいはい、おはようおはよう。朝飯作ってくれたのか。それじゃ、食べようか」
すばやくベッドから抜け出して逃げ出した。
わざとらしく頬を膨らませる彼女の姿を見て、ちょっと可愛と思ってしまった自分が憎い。

「――で、さ。今日から俺学園行くんだけど」
テーブルに並べられた朝食に手をつけながら何気なく言う。言外には、お前とは今日別行動だねと言葉を混ぜてやる。
だが、期待に反した答えが平然と返ってきた。
「はい、私も同じ場所なので案内します」
「……いや、俺どこ行くか言ってないよね」
「安心してください。調べました。ついでに私も転校手続きしましたので、一緒に転校生です」
何をどう安心するべきかすごく突っ込みたい。
あと、転校うんぬんに関しては異能を行使したのだろうが、こんなことで能力を使っていいのかと言いたい。いや、こんなことだから彼女は能力を使うのか？
昨日の一軒で知ったが彼女――桜河（おうかわ）キーアの能力は便利なものだ。便利すぎて乱用するとヤバ過ぎるが、彼女自身がアレで、能力の使いどころがこんな有様である故に、世界は今日も平和であった。
「まぁ、いいか。それじゃ道案内だけ頼むわ」
あまり否定してばっかりももったいないので、自分に都合のいい部分だけ受け入れることにしている。
「えぇ、頼まれました。ついでに街も案内しましょうか？」
「そっちは一人で回る。だいたい昨日走り回ったおかげで、大まかには分かってるし」
そういえば、昨日また来いって言われてたところがあったっけ。たしか名前はイズマキ統合特設病棟。イカレたフツーの人たちが住み着いている、正真正銘異能者のための病院（オリ）だ。
でも、関わりたくなし無視でいいや。
「むー、わかりました」
以外に聞き分けがいい返事が返ってくる。昨晩、一緒に暮らすとことに決まった時の彼女のテンションのことを考えたら、もう少しゴネられるかと思ったが、すっかり落ち着いているようだ。

「それではそろそろ着替えて出かけましょう。着替え、手伝いますよ。それとも私の着替えを手伝いますか？」
とかく後者をプッシュした感じで問いかけてくる。
「どちらもお断りします」
「えぇー」
口を尖らせながらも、はっと気がついたような顔をした後、ちらちらと俺の顔を見て頬を赤らめた。
しかも機嫌は良さそうなのがちょっと怖い。
「それでは、いつでもお待ちしておりますから」
どれだけ待っても、一生行かないんじゃないかなー。

そんなやりとりをしながら、ふと、思い出す。そういえば、昔師匠から聞いたことがあった気がするある日の話し。
異能者とは郡から解き放たれた人だ――と。どこかうらやましそうにつぶやいていた。
異能者が異能者である最たるモノは、その異質な能力ではなく、心のありかた、意識のなんやらがウンタラカンタラ。長々続く注釈をはさみ、最終的には郡を必要とせず、個のままで生きて死んでいける存在であるのだと。
どこかのお偉いさんの論文を斜め読みして得た知識だと自慢していたことだけは明確に思い出した。
馬鹿じゃないの？　とその話しを聞いた時は思ったし、今でもそう思っている部分は大半だ。だってこうして異能者の街があって、その中で暮らしている異能者たちは、フツーの人と変わらない。人ならざる人と言っても、根本はやっぱり人間であり、郡として生きる存在。　人から生まれた以上、本質的には人以外になれない。ソレが俺の考えだった。
でも、彼女の執着ぶりを見ていると、ちょっとその考えが揺らぎそうである。

もしも桜河キーアにとっての本質的な異能は――と考えると、うんざりするような虚脱感を着替えを覗かれながら感じる俺なのであった。

■◇■◇■

転校した学園で初めての昼休みを迎えた。それは同時に俺の転校イベントもつつがなく終了したことになる。
むしろ、腫れものに触るようにあたりさわりのないやり取りしかクラスメイトはしてこなかったことには、逆にどうしようかと戸惑った。
なにせ愛読書(マンガ)で学んだ知識とは全く違った展開で、気合を入れて考えていた自己紹介がパーになってちょっとガッカリ。というか、そんなことを考えていた俺がバカみたいでショック。
どうやら、外から来たここに送り込まれたヤツに対しては、最初みんなこんな感じで接するらしい。まぁ、ここに送り飛ばされる連中の経緯を考えると、気持はわからんでもない。だが、その誤解を解くために自分から積極的にはっちゃけることはちょっと抵抗がある。
だから、誰かに聞かにココに来た理由をたづねられたら、べつに、送り飛ばされたんじゃないから、自分で望んで来たんだからね。と、消極的に積極性を出してツンデレ風に答えてやろうなどと変な思考が頭をよぎる。
などとそんなバカなことを考えてぼけーっとしいる俺とは正反対に、キャッキャウフフとクラスの女子達と会話に花を咲かせているのがキーアである。
あやつ、もともとはここの生まれの上、　以前はこの街の乙女の花園と名高い学校に通っていた言う。それがなぜ転校したのか、俺

との関係は何なのかとか、話題に事欠かなかった。最初にはっきりとキーアとの関係を否定しておいたのに、会話の途中途中で俺の方を見てくるためそれが周囲を邪推させる。
「よう、転校生。恋人をとられて不満か？」
何気なくキーアから視線を逸らしたとき、不意に声を掛けられた。
茶髪のイケメン君とその半歩後ろには小柄で愛らしい女の子。
イケメン君は人当たりが良さそうでありながら、どこか値踏みしているような目とが気に入らないというのが第一印象だが、驚異はなさそうなので問題ないと判断。むしろ女の子が不満げな目で俺を見ている方が不思議だ。
「それは最初に否定しただろ」
「あぁ、あのキーアちゃんが『二人は恋人』と言をうセリフにかぶせ気味に否定した時ね。まるで漫才みたいで、むしろ仲の良さが強調された感があるんだけど」
「仲が良い――とは一概に公定したくないが、否定もできない関係だからなぁ」
「なんかややこしいのか？」
「ここに引っ越しする前からややこしい関係が始まった気がする」
思い返せば、師匠に『隣人との付き合いはしっかりとしておけ、最後に自分の身を守るのは他者との関係だ』などという忠告を間に受けて、なれない人づきあいを始めようとしたことが発端だ。でも、エリーとの関係がなかったら今頃路頭に迷っていた気もするので、なんとも言えないむずがゆさだけが残る。
「まぁ、仲のいいヤツを作っておくのは正解だな。なんだかんだでこの街は助け合いで生きていくしかないんだから」
なんか師匠と同じこと言うし。そうなると、ますますもってやっぱりここは普通の街と変わらないんだなと思い知らされる。
「で、そんな俺を冷やかしに来たあんたこそ、恋人自慢？」
と、視線をイケメン君からその後ろにくっつく女の子に送ると、なぜかキツイ目で睨まれた。

「おっとすまんすまん。俺らの自己紹介がまだだったな。俺は穂邑（ほむら）直純（なおずみ）。で、こっちが幼馴染の夏海信子（なつみまこと）。俺達も恋人じゃないから。ただの幼馴染」

「なる。幼馴染。それは恋人じゃなく婚約者の別名だったな」

「お前は何を言っているんだ」

「愛読書の多くは、主人公と幼馴染が結ばれるエンドが多数を占めているが」

「お前が二次元（どんなもの）を愛読しているかよく分かったよ」

「ソレが分かるお前も、もしかして――」

　会話が途切れ、視線が交錯する。

　その先には言葉は無く、ただ強く握手を交わす男二人。今ココにソウルメイトが生まれたきがした。

　そんな光景を昼休み終了まで、冷ややかな目で見つめる夏海信子だった。

この世界この街で――Ｅｘｐｌａｎａｔｉｏｎ

「んーっ、思ったより普通の授業だったなぁ」
一日の授業も終わり、時間は放課後。
思った以上に普通の学園生活であったことに驚いた。授業内容も、国語に数学、日本史に科学ｅｔｃ．……外でやっていた学園の授業と何ら変わりないものしか行われない。
もう少し異能者ではなく普通の人間として生きろ的な、洗脳授業があるんじゃないかとここに来る前に師匠と笑って話していたことがあったが、全くの杞憂だったことに少し驚いた。
いくら異能者達の街とはいえ、完全な自給自足で維持できるわけがないため、街として維持する為に外とつながりを持ち、支援を受けているのは想像に難くない。だったら、外へのご機嫌取のために――と考えていたが、そういった気配が一切ない。
異能者を兵器にするため、この街では政府の秘密実験が――などという噂が外では絶えないにもかかわらずだ。
「うっす、ミッチ。学園初日はどうよ」
幼馴染を半歩後ろにつれて現れる直純。この状態がデフォルトなのだろうか。
「ミッチ言うな。でも感想としては、外と同じようなことやっててちょっと拍子抜け」
「まぁ、この辺りは普通の人間に近い奴らの集まった場所だからなー。お前も入市する際に受けた適性検査でそう判断されたからここに来たんだろうし」
たしか、異能者の中でも比較的異能深度が浅い者は北側、外との入口近くに配置され、異能者の異能深度が深いほど南側に、そもそも本当にヤバいのは病院送りだと、ここに来る前に師匠と調べたことがある。

そして、この街の住人が北側に集中していることを考えると、この街に暮らしているほとんどは——そういうことなのだろう。
「それもそうか。でもさ、ほらあるだろマンガとかで。能力とかの設定説明をするために、学校で講義があったり」
「それ本当にマンガの世界の話し。異能はそれぞれ違うんだし、定義付けに意味ないし、そもそも異能者の解明だって明確にできてないんだ。異能の講釈を聞きたいんだったら病棟（イズマキ）に行った方が早いぞ」
なるほど。あそこのイカレた連中なら嬉々として講釈をしてくれそうだ。
「あと、異能者だらけだって言うのに誰も能力を使うそぶりすら見せないのは驚いた」
「そりゃ生徒会と風紀委員の中に自警団本部の奴らがいてな。そいつらが頭の固のなんの。だから今年度は能力の制約が特に厳しい」
「自警団、本部？」
「あぁ、南の端にな。真織市の最終防衛ラインだから、強い奴が集まっている場所。御節介と自己犠牲と暴力が大好きな連中の巣窟だ」
「南の端って海沿い？」
　この街の南端は海である。市壁も円状に囲われた形で作られているが、南端の方だけ途切れており、森を挟んで海が真織市にはある。地図で確認した時、こっから脱走できるんじゃないかと思ったのだが、自警団が食い止めているのか？
「いや、その手前。白霧（しらきり）の森の前」
「また知らない単語」
「あぁ、すまん。そうだな、一言でいえば『異獣病』の連中が住み着いている森のことだ」
　異獣病——たしか、かなり昔に海外で発生した病気の呼び名。たしか、異能者の異能で変質したウイルスにかかると体が変質してしまうため、キャリア自身は異能者でもないのに、異能者判定をくらって争いが起こったとか。　で、最終的には対地射撃衛星砲（サテライトレーザー）でウイルスが発生した周辺を焼き払って終息させたと聞いているが、

生き残りがここに逃げ伸びているのか。
「で、その森に『異獣病』の連中がわんさか住み着いていて、下手に手を出せば戦争で、喜ぶのは外の連中だけ。だから互いに干渉しないようにしている。おかげで市壁も森の入り口で途切れているから、森を通って脱走し放題。だから自警団本部は森の前にあって、強い奴が集まっているんだ」
「ふーん」
「ですが、ここだけの話しですけど──」
「「うをっ！！」」
突然現れたキーアに男二人大いに驚く。
そのリアクションが大いに満足なのか、にんまりと笑っている顔がむかつく。
でも信子ちゃんはノーリアクションどころか、いい加減俺を睨むのはやめてほしい。
「白霧の森の住人なんですけど、実は真織市側と取引がありまして、真織市への密入出しようとしている輩に対する番犬をやっているそうです。そして、見返りとして森で暮らすことを黙認されているとか」
「へー、よく知ってるな」
「まぁ、情報収集は得意ですから」
関心する直純に対して、えっへんと胸を張るキーア。だけど、こいつの能力を知っている俺からすればドンビキ以外なんでもない。
「それより、そろそろ帰りませんか？　クラスの皆さんもほとんどお帰りになりましたし」
気がつけばクラスメイトの大半がいなくなっている。
「でも俺としてもう少しココにいてもいいような気がするな。具体的にはお前が帰るまで」
「なんでですかー！」
「んなのお前が一番わかってるだろ」
この元ストーカーが。

「そ、そんなこと言うのなら、えーっと、ば、晩御飯は作ってあ、あげませんよ、よ」
めちゃくちゃ声がどもっている上、目が泳ぎまくっている。明らかに『嘘ですよ、見捨てないでください』と言っている態度がなんだかほほえましくて、ついつい謝ってしまいそうで恐ろしい。
「なんだなんだミッチ。お前ら飯を作ってもらうような仲なのかぁ？」
しまった。大失点。あと、ミッチって言うな。
「さて、帰るか」
すばやく立ち上がって教室を出ようとしたが、すぐさま直純に捕獲された。
「おいおい、俺とお前の仲じゃん。ごまかすなよ」
「いや、それはな――」
ごまかせ、とキーアにアイコンタクトを送ろうとしたら、信子ちゃんがなにやらぼそぼそとキーアに耳打ちしていた。
「私と隆道さんの馴れ初めですか？　それは運命と呼べるものでー―」
「お前は何を言っているー！！」
「おいおい、なに慌ててるんだよ。やましい関係なのかぁ」
やめて、そんなニヤケ面でこっちを見ないで。それじゃぁ、どんなイイワケしても無駄といっているもんじゃねーか。ついでに信子ちゃん、俺には見せない目の輝きをするんじゃない！
「ちょ――！！」

「あなた達、うるさいですよ！」

突然教室のドアを開けて現れた一人の少女。三つあみおさげで、見るからに真面目な雰囲気。コレで眼鏡をかけていればあだ名は完

壁に委員長と言えただろう。
その姿を見た直純が「げっ、風紀委員……」と、小声でもらしたのが俺の耳に届いた。
「部活のない生徒は既に下校の時間です！　何を騒いでいるのです——か……」
俺を見ながら、言葉が次第に尻すぼみになっていく風紀委員ちゃん。
なぜか分からないが、とても驚いた様子で目を見開いて俺を見つめてくるため、キーアが何を勘違いしたのかムッとした気配をかもし出し始めた。
「えーっと、騒がしくしてすいません。とっとと帰りますんで」
これ以上ここにいると収集がつかなくなる予感がしてきたので、さっさと立ち去ろうとした時、
「ちょっと待ちなさい。貴方、今日来たっていう転校生？」
「まぁ、そうですけど」
「それじゃぁ、昨日、もしかして……夜子姉さんと喧嘩していた人？」
「夜子姉さん？」
一瞬誰のことを言っているのか本気でわからなかったが、もしかしたらと思う人物が脳裏に浮かんだ。
「もしかしてあの自警団の人か？」
直純が風紀委員に自警団の人間がいると言う言葉と、喧嘩という言葉にアタリをつけて問いかけてみたところ、どうやらビンゴらしい。
風紀委員ちゃんの顔が次第に怒りの表情になっていく。
「やっぱり、私の見間違いじゃなかった！　貴方のせいで、夜子姉さん、減俸と謹慎くらって自棄酒真っ最中なのよ！　私が昨日どれだけ迷惑を被ったか！！」
「それは知らねーよ！　確かにしなくていい喧嘩だったけど、売ってきたのはそっちだろ！！」

「だけど貴方、その後進入禁止区域に入った挙句で能力をつかったでしょ！　病棟(イズマキ)から報告来てるんだから」
あぁ、やっぱりあそこって進入禁止だったんだー。と思い当たる節がありすぎて全力でとぼけるしかない。
「何を根拠に言っているのやら」
まさか、あの連中が自警団とはいえ異能者に監視カメラの映像を渡すとは思えない。口頭ていどのやり取りで終わっているだろう。だったら名前は名乗ってないので、外見的特長しか伝わってないはず。そして俺の外見はごくごく平凡普通の没個性的な容姿だから、特定されることは無いと自信をもって言える――はず。
何を聞かれても知らない分からないで押し通すのみ！
「確かに全部私のカンだけど、貴方を捕縛して尋問すれば分かること」
って、それは想定外！
風紀委員ちゃんの周囲の光景が歪んで見え始めた。どんな力かわからないが、能力を展開し始めたようだ。
「ちょっ、風紀委員が学園内で私用で能力使っていいのかよ！！」
「コレは風紀委員としてではなく、自警団としての対処なので問題なし！」
直純の直訴も問答無用で却下され、一瞬即発の状態。
ならば、もはや戦うしか道は無い。なぜなら捕まった時の言い訳を考えていないから――！
「さぁ、転校生！　おとなしく捕まりなさい！！」
瞬間、風紀委員ちゃんの力が解放された――

彼らが見るモノ――Ｂｏｙ meets ｇｉｒｌ

異能者とは、ヒトがその特異点を行使するから称されるのではない。
ヒトの形をした特異点こそが、異能者と称されるのである。
それ故に、彼らは人から生まれた人以外の存在なのである。

異能者論文「Ｉｃｈに繋がる者達」第三章冒頭より抜粋

「ふぅ、とりあえずこれからどうしようか」
風紀委員ちゃんの能力がとき離れる瞬間、後ろを振り返り全速前進。俺とキーアは窓ガラスをぶち破って外へ飛び出した（教室が二階でよかった）。
その際、直純達や教室に残っていたクラスメイトの姿を確認してみたが、とっくに姿を消して逃走していたため、被害を被ったヤツはいないだろう。
「なんだか背中がひりひりするし」
「あっ、制服の後ろちょっと焦げてます」
意識すると若干焦げた匂いがする。初日から制服がダメになりそうで怖いな。
「――さて、俺としては売られた喧嘩は買いたいところだが」
「でしたら、私が精神崩壊（クラッシュ）させましょうか」
若干キレているキーアが物騒なことを口にする。
そして、キーアがソレが出来ることを俺は知っているから、ダメ、絶対。
「それは後がめんどくさいから却下。もしやった瞬間お前の生身を

自警団に持ってくぞ」
　えー、と不満顔をするキーアさん。本当にこいつ、他人のこととなると物騒な性格になるな。
「では、どうするんですか？」
　そう聞かれると、どうしようかと考えてしまう。
「風紀委員ちゃんの能力、何だと思う？」
「そうですね、干渉していませんから正確なことは分かりませんが、見たところ限定的な『気象の制御』ではないでしょうか」
　だとすると、風紀委員ちゃんの周囲が歪んで見えるたのは高熱による陽炎で、背中を焦がしたのは熱波というところか。
「そして、彼女ほどの異能深度ですと、高温の制御だけでなく低温の制御もやってのけそうですね」
　なんという歩く異常気象。でも、エアコンいらずで夏と冬は便利そうだ。
「さっきのは、ヘタすりゃ蒸し焼きの丸焦げになりそうだったな」
「ですね。入り口のドアが少し溶けてましたし」
　となると、室内での戦闘は極力避けなければならない。
　限定的な空間は彼女の武器になる。オーブンや冷凍庫の要領で焼いたり凍らせたりしてきそうだ。そりゃクラスメイトもさっさと逃げるわけだわな。
　しかし、俺がここで逃げ帰っても明日また喧嘩を売られそうなので、ここできっちりケリを付けておきたい。
　だけどその前に、いればいるで話しを拗らせそうな邪魔なヤツがいる。まずコイツを排除せねば。
「よし、作戦はこうだ。お前が風紀委員ちゃんに殴りかかる。返り討ちに合っているところをで俺が風紀委員ちゃんを捕まえる」
「えと、能力使ってはダメなんですか？」
「ダメ」
　そう言うと、すごく悲しそうな顔をされた。なんか被虐心をくすぐられる。

「ならお前を盾にしながら突撃を――」
「どうしても私を虐めたいんですね。それなら隆道さんが直接虐めてくだされば、私すごい喜びますよ」
ヤバイ、こいつサドもマゾもどっちもいけるクチだ。
「すまん冗談だ。お前もう帰ってろ。これ以上ココにいても話しがややこしくなるだけだから」
「えー……あっ、いえ、分かりました。帰って夕飯の仕度をしていますね」
何かひらめいたかのような表情を見せたため、本当に夕飯のためだけに帰るのか心配になったが、もう家に帰ってくれればなんだっていい。
俺は黙って帰るキーアの後ろ姿を見送り、学園の門から出て行くのを見届けた後、昇降口へ向かう。

「あら、一人で来たということは覚悟を決めたということですか？」
玄関をくぐって昇降口の先に見えるは、仁王立ちで待ち構えている風紀委員ちゃんの姿。
「いや、覚悟ってかさ。今回の一件はお互い話せば分かり合えるはず」
「犯罪者の話しは尋問室で」
やべぇ、問答無用で断定されてる。
「さぁ、おとなしく捕まりなさい！」
風紀委員ちゃんから熱波が放る、が、今度は熱より風が強い。目が乾燥して開いていられない。
その瞬きをしているわずかな間で、風紀委員ちゃんが距離を詰めてきた。
「もらった！」
「それは、もらってないフラグ！」
伸ばされた腕を、逆に掴みとる――が、

「あづっ！！」
ドライアイスを握ったような冷たい熱さ。反射的に手を離してしまった。
「はっ！！」
その隙を突かれて、風紀委員ちゃんの強烈な蹴りが俺の腹に突き刺る。つーか、マジ痛い！　躊躇無さすぎ！
しかも実戦馴れしすぎて、隙がまったく見つけられない。
「跪け！」
蹴りで俺との距離を開けた間隙をぬって、今度は寒波を放ってくる。
瞬時にして体温が奪われ、手足の感覚が失われ立っているのが辛くなってくる。
ヤバ、風紀委員ちゃんマジで強い。こりゃ確かに学園で幅を利かせているだけあるわ。
どうしようかなぁ、と痛む腹と寒さを堪えて考えていると、なぜか風紀委員ちゃんが冷めた目で見ていたことに気がつく。
「さて――どうして夜子姉さんを退けた力を見せないのかしら」
「あー、あれには、諸事情が。殺し合いじゃないんだし、そうそう出せるものでは……」
「へぇ、私とは殺し合いが出来ない――と」
あれー？　なんか目的違ってませんか？
と思っていたが、直純の言葉を思い出した。
『御節介と自己犠牲と暴力が大好きな連中』
つまり、犯人を捕まえようとするのも、規則を守らせようとするのも、こうやって戦うことも、彼女達にとっては実益を兼ねた趣味――
あっちゃー、な存在に目をつけられたものだと今さらながらに気がついてしまった。
しかし、そうでもしないと納得してくれないとなると、こちらもいよいよ覚悟せざるおえない。

「……わかりました。ただし、貴方に勝ったら無罪放免を約束してくださいよ」
「えぇ、いいわよ。もともと貴方に罪状はないのだから、見逃してあげるわ」
だったら、いいか。見せてやろう。

黒い星が浮かぶ空。
朝と夜同時に存在しているその世界。
草原の海で寝転ぶ少女。
「あれ？」
寝ぼけた頭に寝ぼけた体。それでも分かる。あのヒトの声が。
少女はすごい勢いで飛び起き、空を見上げた。
変わることの無い、朝と夜と黒い星がそこにある。
だが、少女だけが分かるその感覚。少女だけが知る世界ノ全テ。
今、世界が求められている。
ソレはつまり少女が求められているということ。
少女の口元が釣りあがる。
だったらそれじゃぁ、始めましょうか。

『裏方仕込（デウス・エクス・マキナ）の大舞台を！！』

■◇■◇■

目が醒める。
痛いし寒い。だったらまず、体の修復からだ。
腹部の痛みは握りつぶす。
次に血行を全身にいき渡らせ、最後に寒さ自体を無視。
よし、これで行動が可能になった。
次は目の前の敵を殲滅開始。
ただし条件が付けられてて、本当に殲滅ダメ。戦闘不能までした力が出せない。
敵さん、なんだか急に雰囲気の変わったオレにちょっと困惑気味。
あはは、でももう遅い。
アンタが望んだことだ。
しっかり喰らっておけよ。
「心臓に触れる右手よ――」

■◇■◇■

気を失った風紀委員ちゃんを背負って保健室までやってきた。
「失礼します」
保健室のドアを開けると、校医がちゃんと待機してくれていた。
しかも女医。やったね。
「おや、また風紀委員長が暴れているからと聞いて待機していたら、本人が運ばれるとは」
おい、またって――いや、気にすまい。とりあえず引き渡してさっさと帰りたい。体痛いし。

「気を失っているだけですから。ベッドで寝かせておいてください」
「ほぉ、彼女相手に外傷なし、しかも彼女にも外傷なし——か。どんな能力で倒したのやら」
「さぁ？　それじゃぁ宜しくお願いします」
「ん、ごくろうさん。あぁ、そうだ、彼女が気を失っている間に手を——」
「出すわけ無いでしょ！」
仮にも教員の立場だろうが！　と突っ込んで退室した。

余談だが、猛烈な虚脱感と節々の痛みに耐えながらマンションに帰れば、
「お帰りなさい、ご飯にします？　お風呂にします？　それとも——」
と裸エプロン（さすがに本当に裸になる根性は無かったのか、下着は着用していた）で出迎えてきたキーア。
その顔は、突っ込んで！！　と本気で望んでいてドンビキだった。
しかも、全力スルーしてやると、放置プレイですねと大喜び。
さらに頭も痛くなって、その日はそのままベッドへダイブ。
瞬く間に意識は夢の中へ吸い込まれていった。

彼女のセカイ――Daydream

夢の中で夢をみる。

黒い星が浮かぶ空。

朝と夜同時に存在しているその世界。

一面には草原の海。

これが俺の深層風景。自我と無我の境界で見る白昼夢。

この先は、異能に届く道でありながら、その道を塞ぐように存在する世界。

この世界こそが俺の異能の姿。

『裏方仕込の大舞台（デウス・エクス・マキナ）』

口にするには恥ずかしい異能の名前。でも、言葉にしないと発動しないクソ仕様。

そもそも俺自身、異能者でも何でもないタダの人なのだからしかたがない。

「いらっしゃーい、兄さん」

ツヤツヤテカテカとした顔で出迎えるこの世界の住人にして主。

あの日、俺を殺し繋がったその時から、この深層世界に住み着いている、憎憎しい我が妹君。

クソ、昨日も含めて三回も起こしたものだから、はしゃいでいるのがよくわかる。心臓がすごく痛い。

「にしし、昨日今日とごくろうさま」

「相変わらずお前の顔はムカツクなぁ」

「やっぱり血かな。私は兄さんの顔大好きだよ」

　にやにやと笑うその顔は本当にムカツク。
コイツといい師匠といいキーアといい、なんで俺の周りの女はイカレたヤツらばっかなんだ。
類友？　知らんがな。
　しかし、目の前のアホがはしゃぐ理由は分かっている。
　裏方仕込の大舞台（デウス・エクス・マキナ）（命名は我が妹）の能力の効果は、これまた口にするのも恥ずかしいことなのだが、その名のとおり『神』の力を行使できることだ。
　ちなみにここで言う『神』とは我が愚妹の事を指す。何を根拠にとっつこみたいが、本人的には何かしらの定義に基づいているらしく、聞けば堂々と答えてくれる。でも、傍から見ればちゅうにびょ……。
　とにかく、自称神の座に至ったと申す妹、それと同化し、自我を共有し、本当にひとつの『異能』となるのが俺が使う能力――らしい。具体的に何が出来るのかと言われると、妹曰く、何でもできると言う。
　妹からいろいろ講釈はされたが、説明されればされるほどワケの分からない設定ということだけしか俺には理解できない。
　ただ、俺が理解している部分は、能力を行使するということは、妹に求め請うということ。
　そして請われた妹は、俺を求めるということ。
　つまり、俺はこの俺を殺した女（ヤンデレ）の相手をしなくてはいけなくなるということだ。
「しかし、風紀委員ちゃんもご愁傷様だな。お前にセクハラ三昧だったんだから」
「でも、攻撃することに託けて真っ先におっぱい触ったのって兄さんだよね」
「まあ、アレは仕方が無いだろ」
「あのまま召し上がりたかったと正直思った」
「それだけは断固阻止する。それに右手じゃないとダメだ言ったの

お前だろ」
「そういうものだし。でも、ナイスおっぱいさんだったでしょ？」
「それは否定しない」
お互いにあの時の話しから、おっぱいの話しにシフトしていく。
エロい方面は気が合うからやるせない。
「——そうだ、おっぱいといえば桜河キーア。あのヒト、ココにきたんだった」
「マジか——って、アイツの能力ならできるだろうが、いつの事だ？」
「兄さんが引っ越しの挨拶をしに行った時、顔を合わす前のことだね。まぁ、私が門前払いしてやったけど」
感謝しなさいと、無い胸張ってアピール。
たしかに、コイツがおらずキーアがここに入っていたらと思うとぞっとする。
「だったらなんでキーアが俺に付きまとうのかわかるか？」
「んー、予想はつきます。でも、女として口にはしたくなーい」
「女として？　妹としてでは無く？」
「うん、女として」
こういう言い回しをするときは、決まってめんどくさい方面なので聞き流しておくことにする。
「しかし、あの女の魂の侵略者（ソウル・クラッカー）の能力は私でも真似できないから気をつけておいたほうがいいよ」
「は？　そうる……なんだって？」
「魂の侵略者（ソウル・クラッカー）、私が名づけたキーアの異能」
なるほど、いつものアレね……
名称がないと分かりづらいからしょうがないか。
でも、本人は『干渉』とか『接続』とか簡潔に読んでいた気が……
「——しかし、気をつけてって、お前に出来ないことは無いんじゃなかったのか」
「それはこの世界で、でのこと。アレはまた別の系統で繋がった道

だから私には真似が出来ないの」
　また俺には理解できない言い回し。
「でも、お前がいるから大丈夫だろ？」
「もちろん。私はこの世界のカミなんだから」
「なら、問題ない」
　妹の屈託の無い笑顔。
　たとえ理解できなくても、今は、どこから来るか分からない妹の自信に信頼をおいておくことにする。
　どの道一蓮托生なんだから、じたばたしようが無いというのが本音なのだが。
「――さて、そろそろ満足したか？」
　ここは彼女の領域。断り無く立ち去ることが出来ない。
「えー。もっと話したいー」
「俺はしばらく顔も見たくない」
「でも、そんなこと言っても、また私を求めてしまう兄さんなのでした」
　この先、今日みたいなコトがまたありそうで、否定できないのが辛い。
「まっ、今日のところはいいでしょう。昨日も話したし。それじゃぁまた明日、ね」
「絶対ソレはない」
「ふふん。それはどうかな」
　そんな不吉な予言を最後に、世界は白んでいく。
　ここは俺の深層風景。自我と無我の境界線。
　しかし、ここの主導権を握られているのが毎度のコトながらムカツクと、醒めていく意識の中で思うのであった。

彼女のセカイ――Daydream（後書き）

とりあえずここまで勢いで書いてますが、どうでしょう。
なにかしら一言でもいいので感想をくださいますと、作者は小躍りしながら喜びます。酷評だとたぶん泣きます。
でも、とにかくご意見・ご感想、誤字脱字の指摘など、なんでもいいのでよろしくお願いします。

その日の話し――Hide a person

「はぁ？　悪魔ぁ？」
学園での昼休み。俺と直純と信子ちゃんの三人で食事をしているときのことだった。ちなみに、外面がいいキーアは、他の女子生徒と食事をしているためココにはいない。
食事の話題として出してきた直純の言葉に訝しげな顔をすると、直純の隣に座っていた信子ちゃんが睨んできた。
もう学園生活も三日目となるのに、いまだ信子とは言葉を交わしたことも無い上、睨まれ続けている。なぜだ。
「そう、悪魔。南からやって来たらしくてな、この辺りの自警団支部じゃその話題で持ちきりだぜ。生徒会長や風紀委員長も、本部からこっちに駆り出されてるくらいだ」
風紀委員ちゃんといえば、あの喧嘩の次の日、生徒会長に引っ張られて謝りに来たっけ。
一応ごめんなさいと言ってくれた――いや、あれは言わされていたか。そのため、態度は非常に不本意そうで、唇を尖らせ視線は明後日の方向を見ていた。戦っている最中も思ったけど、彼女、見た目と性格が間逆で凄く残念。
「しかし、お前。そんな情報どっから手に入れてくるんだ」
「俺の家、自警団支部の近くだから」
「ふーん。でも、そんなの『異獣病』のヤツが出てきとかそんなところだろ？」
異獣病に感染した人間は、本当に人間以外の姿をしている。それこそヒトとしての原型を留めない、化物（モンスター）と呼べるような無残な形。
そういえば昔、某悪魔召喚ゲームで出てくるご立派様の様な容姿をしたヤツを見たときは、驚く前に笑った記憶があるな。
「多分そうだと思うんだけどな。でも、一説では病院（イズマキ）の秘密実験生

物が脱走したとか、ホンモノが現れたとか、情報が錯綜してるんだぜ」
「馬鹿馬鹿しい。前者ならともかく、後者は絶対に無いだろ」
よくもまぁ、このご時世に『ホンモノの悪魔』なんて恥ずかしい噂が流れるものだ。
「おっ、お前はそう思うのか」
なぜかにやにやと笑いながら言う直純。理由がわからな以上、とりあえず思ったコトを言っておく。
「妹曰く（だれかさん）、悪魔とは、「煩悩」「狂気」「邪心」といった、抽象的な形の無い『良くない』モノのことを言うらしいからな。俺（異能者）はそれに同感だ。もし、形のある悪魔がいるとしたら——そりゃ俺達のことだろ」
「へぇ、なるほど。よかったな信子」
「ん」
初めて聞いた信子ちゃんの声に驚いた。ついでに表情が若干柔らかくなったことに驚いた。
「どーゆーこと？」
「まぁ、信子（こいつ）の家、タチの悪い宗教家でな。いろいろと苦労しているんだ」
「あいつら皆、死ねばいい」
うわ、可愛い声でソレはヤバイ。何がヤバイって、もしM属性をもっていたら、もっと罵ってとお願いしたくなるぐらいヤバイ。
「それじゃぁ今、悪魔騒ぎで信子ちゃ……いえ、夏海さんの家、大変じゃないのか？」
信子ちゃんの名前を口にしたら、一瞬にして柔らかかった表情が強張り「勝手に名前で呼ぶな」と目で怒られた。
「まぁ、今俺の家に避難してるぐらいだしな」
「居候」
ちょっと誇らしげに言う信子ちゃん。
「え？　なに？　人のこと散々同棲だなんだとからかってくれたの

に、お前らもなの？」
　風紀委員ちゃんとの喧嘩の次の日、やっぱり問い詰められてしぶしぶ自白させられ、その後さんざんからかわれた記憶はまだ新しい。
「いやいや、コイツが勝手に来ただけだし。それに雪風と仲悪くて、こっちが迷惑してるぐらいだ」
「雪風？」
「俺が可愛がっている自慢の犬だ。いつか擬人化してご奉仕してくれる予定だぜ」
　なんだろう……俺も大概だと思ってたけど、今、直純がとても痛い子に見えてくる。
「犬か、俺は昔猫飼ってたな。全然懐いてくれなかったけど」
「犬はいいぜ。忠実だからな」
「まさにビッチ（ぼそっ）」
　聞こえた！　今、女の子が言うようなことじゃないセリフが聞こえた！
　ちょっと前までは信子ちゃんの声を聞きたいと思っていたのに、だんだんと黙っててくれた方が幸せな気がしてきた……
「でも、最近の悪魔騒ぎで、散歩が出来なくなってるのがこまるんだよな」
「なんでまた」
「悪魔は朝と夜に出るらしくてな。自警団に見つかると説教されてめんどくさいんだよ」
「そりゃ大変だな」
「まったくだ」
　それにいつまでも信子に居座られたくないし、と愚痴る直純だが、信子ちゃんは今の状況がまんざらでもなさそうな顔。
　その後、前のお返しとばかりに直純と信子ちゃんの仲をからかってやったら、なんか愛読書で見たことあるリアクションをしやがって、なんとなく、直純がラブコメ漫画の主人公に見えてきてむかついた。

俺はヤンデレやストーカーという特殊な属性に目をつけられているというのに、コイツは王道幼馴染か。うらやましすぎる。うらやましすぎるから、更にからかうとさらにおなじみのリアクションを見せられ、更にうらやましい——と（俺的に）負のスパイラルに陥る。

そんな不毛なやり取りが午後の授業が始まる予鈴が鳴るまで続き、結局むなしい思いだけが心に募った。

そんな荒んだ心の俺が席にもどったとき待っていたのは、クラスメイトに勧められたというＢＬ本を読んでいたキーアの姿。

足蹴にしてやったら喜びやがった。コイツ、まじでどうすればいいんだ。

悪魔よりもこのストーカーをどうにかしてくれと思う今日この頃なのであった、まる。

——しかし、悪魔ねぇ……。

巡る時——Them?

「うーん……」
時間は放課後。直純達は用事があるとか言って帰ってしまったので、俺はこの後の時間をどうしようかと考える。つーか思ったけど、俺、直純以外友達いないよな。
「どうしました？」
「いや、この後ヒマだなと思って。なにかイベントでもないのかね？」
「うーん……五月も中旬ですし、大型連休が終わったこの時期、テストまで中だるみ必至ですね」
この学園はテストは期末しかない。ということはつまり、六月までこのまったりとした空気の中で学園生活を過ごさなければならないのか。友達作れよと言われそうだがそこは無視。
「でしたら、また風紀委員に喧嘩売りますか？」
「またって言うな。先に売られたのは俺の方だ。そうじゃなくて、なんかもっと面白いことをだな」
「そうは言いますけど……では、ここに来る前は何をしてたんですか？」
「んー、そういえば師匠と一緒にいろいろやってたなー」
「師匠？」
「あぁ、保護者みたいな人でな。あっちこっち連れまわされて、学園生活どころじゃなかったっけ」
そんなに時間がたったわけではないがあの人のことが凄い懐かしく感じる。
まぁ、師匠からすれば、俺のことなんてすでに忘れてしまっているんだろうなーと思えるぐらい、自由すぎる人だった。
「そうなんですか。では、学生っぽくデートでも」
「するならお前以外とな」

とは言っても、社交性ゼロの俺がどうやって彼女見つけるかとは謎であるが。
「家に帰ってイチャイチャと――」
「いいかげん引っ越ししたいんだけどな」
あの半壊した部屋は、とりあえず事故で片付けられたから修理費は市持ちで問題ないが、新居の割り当ては外から来るヤツとの兼ね合いがあるため連絡待ち状態だ。
「大丈夫ですよ。絶対引っ越しさせませんから」
にこりといい笑顔で微笑むその顔が怖いっす。コイツなら本気でやりそう――てか、絶対やる。
もう俺は、あのアリ地獄から逃げられない運命なのか……
「――まぁいいや。今は帰ろうか」
後は野となれ山となれ。うん、いい言葉だ。
「はい。帰りましょうか」
俺の横を忠犬のようにぴったりくっついてくるキーア。
本当は一人で帰りたかったが、見えないところでストーキングされても困るので、一緒に帰るしか選択肢がないのが辛い。
隙を見て腕を組もうとするキーアと、おっぱいの誘惑にまどわされながらも突き放す俺の攻防は、学園の生徒に多数目撃されて、明日からヘンな噂が立ちそうだ。
「ちょっと――放してください！」
「しかし、こっちにはお前を連れて来いと言われている。だから一緒にきてもらうだけだ」
キーアの手が尻にも伸び始めた頃、校門前でなにやら言い争いが起こっているのが見えた。
なにやらグラサンの男が、女の子を車の中に引っ張り込もうとしている。誘拐現場との距離があるため、向こうは俺達に気がついていない様子。
「おや、なにやらイベントが発生していますが」
「いや、こういった系のイベントはちょっと――」

完全に部外者な俺達の意見は非常だった。
「あっ、車に連れ込まれてます」
本当に助けないんですか？　という目で見てくる。
「んー、そうだな可愛い子だったら助けてみようかな」
いまいちここからじゃ顔が見えないからなんともいえないが、でもあの子が本当に可愛くても難癖つけて助けない気満々の俺です。だってめんどくさい予感が凄いするんだもん。
「しかし、あのお嬢さんは能力使わないのか？」
どんな異能かはわからないが、使えば逃げるチャンスは広がりそうなものを。
「そうで……す……なぁん！？」
「ど、どうした？」
今までに無いほどスットンキョンな声を出すキーアに、ちょっとビビる。
「い、いえ、先ほど干渉（コネクト）を試みてみたんですが……」
なにやらかなり動揺している雰囲気。こんなキーアの姿、今まで見たことがない。あの女の子がどうしたんだ——
「って、なぁん！？」
「ど、どうしたんですか？」
思わずキーアと同じリアクションをしてしまうほどの衝撃。あいつ、なんで……いや、今はそんなことを考えている場合じゃない！
「キーア、悪い。予定変更！」
いきなり焦りだした俺を見て、キーアが何か聞きたがっている様子だが、今はそんな状況じゃない。
クソっ！　車が動き出す——仕方が無い！
「裏方仕込の大舞台（デウス・エクス・マキナ）、三秒でいい、力を貸しやがれ！！」
本当に不本意だが、こういう場合のみはあのバカに全幅の信頼を置いている。絶対に俺の望んだ結果を与えてくれると。

一秒で車までの距離を詰め、二秒で車のドアを破壊、女の子を引きずり出す。三秒でキーアのところまで戻り裏方仕込の大舞台（デウス・エクス・マキナ）の効果は失う。

何が起こったのかわかっていないといった顔で、女の子は目を白黒させている。しかし、ここ異能者の暮す街だろ。そんなに驚くことか？

「あのー隆道さん？」

女の子を抱きとめている（具体的にはお姫様抱っこ）俺に不満たらたらのキーア。でも今は無視。車からグラサン男がやってくるが無視。今はただ、腕の中にいる女の子だけが俺の意識を奪っている。

「あ、あの……」

やっぱりそうだ。顔を見れば見るほどに面影がある……

あぁ、言いたいこと、聞きたいこと、たくさんある。でも、やっぱり――

「久しぶりだな。また会えて嬉しいぞ織華（おりか）！」

昔失った大切な親友を、喜び勇んで抱きしめた。

巡る時——Ｔｈｅｍ？（後書き）

やっとこさメインヒロインが出せましたー。

そろそろ人も多くなってきましたし、人物紹介でもした方がいいですかね？

今は解らないいろいろなこと——Turning point

「きゃぁぁぁあぁぁぁあぁぁ！！」

学園中に聞こえるほどの少女の絶叫。その場の誰もが動けずにいた。

あと、叫びにかき消されて当事者にしかわからないが、強烈なビンタの跡が俺の頬にしっかりのこっている。

「ななん、なんですか貴方！？」

顔を真赤にしながら俺の腕の中で必至に暴れ飛び出すと、助けを求めるようにキーアに飛びつく。

キーアはキーアで、今までに無いほど戸惑っている表情。

多分今の俺の顔も傍から見れば、類を見ないほどにきょとんとした目をた間抜け面をしているだろう。

「ちょ、ちょっと、織華。俺だ、隆道だよ！」

「誰ですか、知りませんよ！　それに私は織華という名ではなく、伊頭巻日澄（いずまきひずみ）という名です！！」

はっ——？

「ちょっとまて——」

「待つのはキサマの方だ」

「へぶっ！！」

後ろからグラサンに押え付けられ土を舐めさせらる。

「何しやがる！　このハゲ！」

「俺は禿げていない。ただ薄いだけだ」

あぁ、本当にハゲてるのね……

「それより、いいかげん戻ってきてくれませんか。棟長もあなたの体のことを気にしています」

「けっこうです！　自分のことは自分で責任を持ちますとおじ様に言っておいてください！」
なんだなんだ、人を無視してのこのやりとり。
「ちくしょぉ、いいかげん放せぇ」
「ふん、キサマには関係ない――いや、そういえばキサマ、どこかで見たことがある顔だ」
「はぁ？　こっちはお前のことなんて知らんぞ」
「いや――そうだ。キサマ先日、病院に忍び込んだヤツだな」
どきーん。なになに？　この人関係者ですか？　もしもそうならごめんなさい言っちゃうよ（いきなり下手）。
「――えっ。もしかして、この間の騒ぎは……」
おや？　なんで彼女が驚く？　と思ったが、苗字がイズマキと言ってたな。もしかして、あの日あの場にいたのか？
でもそうなると、本当にコイツ織華じゃないのか？
それになんだ？　ただ動揺しているだけじゃなく、どこか様子がおかしい……
「そうだ、間違いない。見つけたら連れてくるようにと、棟長からのお達しがあったな。だったら二人一緒に来てもらおうか」
やべぇ、なんか話しが不穏な流れになってきた。
キーア助けてくれ――と目配せをしたら、なぜか頬を染めて照れやがった。使えねぇ。
あんなキ〇ガイの巣窟に連れて行かれたら、何があるか分かったものじゃない。ここは、自力で何とかするしかないのか――と思ったら、突然グラサンハゲが俺から飛び退く。
「！？」
ワンテンポ遅れて俺“ソレ”気がつく。
伊頭巻日澄の姿が――違う、彼女の周りの『世界』がブレて見えたのだ。
（うそ！　うそうそうそうそ！！）
ちょっ！　いきなり頭の中で騒ぐな！　つーか、勝手に出てくる

のはルール違反だろ！
(うるさい！　代価はもう払ってるんだからいいでしょ！　んなことより“アレ”！　早く何とかして！)
何とかって何をするんだ。つーか、アレはなんだ。
(お馬鹿の兄さんに簡単に説明しても理解できるものじゃない！　だけど今はいろいろチャンスでしょ！)
あぁ！！　もう、何がなにやら！　とりあえずグラサンハゲが退いたんだからここで倒れている理由は無い。
(そう、そしてあの織華のニセモノを殺しなさい！)
何でだ。てか“アレ”は織華なのか違うのか。
(まったくの別モノ！　外面は確かに似てるんだけど、中身はバケモノよバケモノ！)
神を自称するほどのイタイ子の妹が、なぜかとんでもなく慌てている。本当になんなんだ。
(あれは世界の書き換え——ってヤバっ、キーアが！　早く助ける！)
「!?　キーア、そこから離れろ！」
えっ——っという声がキーアから出るか出ないかの間に、キーアを小脇に抱えてその場から飛び退く。たとえワケが分らなくても、ここは妹に従うのが正解と本能が訴えている。
「ダメよ……ダメ、私、でも、彼なの、あそこから出してくれたのって、それじゃ、もしかして……」
なにやら放心状態でぶつぶつとつぶやきはじめている。それにあわせて、彼女の周囲が——どこかで見たことのある風景に変わっていく。
(ちょっと！　本当に“アレ”止めないと、この辺一帯どんな風に書き換えられるか分かったものじゃないわよ！)
えっ、アレがどんな光景か分らないのか？
(何を言っているの兄さん？)
「あぁ！！　本当にどうなってるんだ——ってか、あのハゲいつの

まにかいなくなってるし。キーア！　彼女の中はどうなってるか分かるか？」

「ご、ごめんなさい……なぜか、彼女とは繋がらないんです……」

　顔面蒼白のキーア。心なしか震えている気がする。

（当たり前でしょ！　“アレ”には道がないんだから！）

「ちょっ、ソレはありえんだろ！　それじゃ“アレ”は——」

（だから言ったじゃない！　バケモノって！！）

「クソッ、本当に力ずくで止めるしかないのか」

（早く裏方仕込の大舞台（デウス・エクス・マキナ）を発動して。多分私なら何とかなる）

「本当か！？　つーか、展開が速すぎて俺は追いつけていないぞ」

（それは兄さんがノロマなだけ。この世は兄さんに合わせて動いているわけじゃないんだから）

「ソレは知ってるけど——」

「隆道さん……？」

　しまった、キーアから見ればぶつぶつ独り言つぶやいているものじゃないか。これじゃぁ、俺も変人に見られる。

（兄さん！）

「仕方が無い！　裏方仕込の大舞台（デウス・エクス・マキナ）！」

　黒い星が浮かぶ空。

　朝と夜同時に存在しているその世界。

　一面には草原の海。

　その世界の主は問い掛ける。

　己が求めるある日の姿。だが、叶わぬが故にここにいられる現実。

　それでも、少女が信奉する全てを手に入れるために。

「まったく……なんで“アレ”が今（ココ）の時代にいるのよ……」

　私は試されているのだろうか——

　少女は虚空の先へ問い掛ける。

　だが、その答えは返ってこないことを知っている。

ならば、と少女は少女の持つたった一つ答えを抱え、世界へ向けて歩き出す。

妹ちゃんのよくわからない設定解説――？

それは、昔々あるところにで始まる、益体のないある日の話し。
萩島隆道という存在がまだ、真織市の外で暮らしていたころの出来事。

「兄さんは、本当におバカさんですね」
妹が兄へ向ける、お決まりのセリフ。
幼いころより頭の良かった妹が、唯一自分自身の言葉を向けられる相手だからこそ、辛辣なセリフが出てくるのだ。
ただ、ここで言う頭が良いというのは、一の全てを記憶できる記憶力でも、一から十を生み出すことのできる発想力でもなく、一を一とたらしめている理由を理解できる、理解力のこと。
だがそれも、独自の発想と言葉があってのことなので、彼女の言葉に共感ができる人間がいない故に、彼女は兄にすがっていた。
当の兄は、わかったようなわかっていないような、へらへらとした笑みだけを浮かべているだけ。
その様子を妹は、私の言葉をわかってくれていると好意的に理解していたことがそもそもの始まりだった。

「兄さん、兄さんは『魔法』というものをご存知ですか？」
「？　それはマンガででてくる不思議議パワーのこと？」
「まぁ、あながち違いはありませんね。人間が理解できるかできないかという観点から言いますと」
妹は自分の考えが披露できる場が来たと、嬉々とした目で兄に向ってつらつらと言葉を述べ始めた。
「そもそも異能者と言う存在が、兄さんが見るマンガで言うところ

の魔法使いに当てはまると思いませんか？」
「異能者のことよく知らない」
「そうですか、ではまずそこから話しましょう」
こほん、とせきをひとつつき、一冊の本を取り出す。
「ここに、異能者論を書いた書物があります」
「それ、どっから出したの？」
「それは、こんなこともあろうかとってやつです。深く突っ込まないでください」
絶対最初から、この話しがしたかったんだなと兄は思った。
「とにかく、まずはこれを読んでもらいたいのですが、活字ばかりの漢字ばかりなので、絶対途中で兄さんは投げ出すのはわかっています。ですから、私が要約してお話しましょう」
自慢げに言うが、妹も漢字が読めずに、散々ネット辞書で時間をかけて調べていたことを知っているが、黙っておくのが優しさだろう。
「さて、そもそも異能者とは人ではありません、と断言します。ですが、世論は外面の人の形に騙されて、いろいろ口論をしていますが、所詮人同士の話し合いなので、論外です。たぶん異能者に聞けばイッパツで答えは出ます」
――あなたは人ですか？
この答えに胸を張ってノーと言う、と異能者である妹は断言した。
「そもそも、異能者とは、人の進化系――とここには書いてありますが、これは語弊です。もともと人が書いてあるだけに、間違った解釈が多いです。ですが、もっとも人が理解しやすい答えも書いてあります」
すなわちそれが、魔法使い。
「ですが、ここいう魔法というのはマンガの中の魔法であって、この世の魔法とはいろいろと違うんですけど、ここで魔法のことを話し始めると、時間が無くなってしまいますので、今は異能者に観点を絞りましょう」

本当に魔法は存在しているんだ。
「はい、あります。でもここでは語りません」
もともと異能者が生まれたのはいつだったのか。
「そんなの、形を限定しなければ、この世が始まってからとっくに生まれていますよ」
では、なぜ人から生まれたのか。
「それは――人の無我が、星の意思に届いたからではないかと私は推測します」
星の意思？
「そう、星の意思。魔法と呼ばれるこの星の根幹。いつか全てが帰る場所」
ですから、進化ではなく帰化になると妹は言う。
「そして、異能者とは大なり小なり星と繋がった道を持つ人のことを言います」
では、人は星とつながっていないのか？
「その答えは、イエスでありノー。この世全ては繋がっているのだから」
繋がっているのならなぜイエスが入るのか。
「それは、うーん、そうね。この星を樹で表した表現がありましたね。この表現が適切と言うわけではないですが、わかり易くはあります。まず、この星は種から始まる。種だった星はやがて木という巨大な存在になる。木となった星は枝という数多の世界を作り、我々はその枝から生えた葉である。で、その中でも異能者の私達は枝に繋がった葉、そしてただの人は、枝から抜け落ちた葉。抜け落ちた葉は土に返り養分となる。ソレすなわち星に帰ることと同義。だから、繋がっている場所の違いになります。異能者は直接星と繋がっているのに対して、人は星の循環の輪の中にしか繋がっていない。これが、異能者と人を分ける決定的なところです」
では、そもそも異能とは？
「それは、星が発生させる『現象』のことです。どれだけ不思議な

事柄に見えても、それは星の理の中で発生するものなのです。それを理解できないからこそ人は異能と呼び恐れているのです。ちなみに私はその『現象』を、昔の人たちの言葉になぞらえて『神』と呼びます」

神——人にとって理解できず、とどかぬ存在の総称。

「この星はイシで出来ています。数多の時をかけて、分裂や結合を繰り返し、イシはこの世を作りました。ですが一つ気をつけてください。この星の始まりのイシはこの星以外のところからやって来た——つまり、この星以外にもイシは存在するのです。そしてそのイシは、今もこの星に降り注いでいます。もしもそのイシが目覚めたのであれば……」

そこで言葉は区切られる。両親が呼ぶ声が聞こえた。

どうやら時間が来たようだ。

「どうですか、すこし駆け足でしたがわかってくれましたか？」

その言葉に、当然のごとく兄は首を横にふるのであった。

「兄さんは、本当におバカさんですね」

妹が兄へ向ける、お決まりのセリフで締めくくられた。

それは、昔々あるところにで始まる、益体のないある日の話し。

萩島隆道という存在がまだ、真織市の外で暮らしていたころの出来事。

兄は人で、妹はまだ、ただの異能者だったころの一幕。

禁獣――Ａｌｉｅｎ

あの後、激しい一進一退の攻防があった――とは妹から聞いた話だ。

なにせ、あちら側に干渉できるのはあいつだけなので、俺はただ伊頭巻日澄お嬢さんの体を押さえつけるしか役割はない。当然傍から見れば、良くて抱擁（ハグ）、下手すればセクハラっぽく見られたに違いない。この辺に関してのキーアさんからのコメントは、

「緊急時だったので仕方がないです」

と、笑顔で言いながらも、目が笑っていなかったのがとても印象的だった。

なんとか日澄嬢を押さえつけた後になって、グラサンハゲが連れてきた回収班によって俺達はまとめてイズマキに搬送されることになった。

（あー、もうイヤ。あんなこと二度とやりたくない。もうあんな光景に見たくない。気持ち悪い、もー吐きたい）

回収班の車の中から、珍しく妹がうんざいりとした口調で愚痴りまくり。うるさいことこの上ない。

俺までうんざりとした気分でやってきたイズマキ統合特設病棟。別名キ○ガイの巣窟。こっちも別の意味でうんざりだ。

なぜか入り口で俺と、キーア＆日澄の二組に分けられた。

そして俺が連れてこられたのは棟長室。

「いや、久しぶりだね。君にはまた会いたいと思っていたよ」

なれなれしく出迎えてくる白衣の優男。

「あんた、ここの棟長だったのか」

あの日、立ち入り禁止区域で出会った人物。

あんな場所にいたぐらいだから、それなりの立場だろうとは思っていたが、見た目二十代のこの青年が棟長とは。
「いやいや、ただここの職員が全員棟長という立場を拒否したから、お鉢が回ってきただけだよ」
うそくさい、と思いながらも俺には関係ないことなので聞き流しておく。
「君とはまた話したいと思って招待していたのに、なかなか来てくれないものだから心配したよ」
なんで俺こんな胡散臭いやつに気に入られているんだろう。「さて、君も聞きたいことや言いたいことがたくさんあるだろうが、まずボクの質問に答えてくれ。そうすれば、後は全部君の質問に答えよう」
「なに、そのウソくさい条件。ありがたくて涙が出そうだよ」
「いやいや、それだけボクは君を評価しているのさ。さて、まずはこれだけは聞きたいんだが、君の異能は――星の意思、つまり魔法かね？」
思わず笑いそうになった。人である存在がその言葉を口にするのか、と。だが、
「妹（アレ）は星（それ）の意思になりたいと言ってたっけ。今はその末端に触れているだけの偽物（イミテーション）だと」
目の前の人以上に、ソレを渇望する『神』がいる。
「なるほど……」
隠すようなことでもないので、素直に答えてやったら、何やらぶつぶつと呟いて考え始めた。
「いや、すまない。うん、聞きたいことはそれだけで十分だ。君の質問には何でも答えよう」
(あれはたぶん、私の能力の利用価値を探っているんでしょうね)
まぁ、使い方次第では、何でもできるからな。でも、その辺を考えるのは俺の領分じゃない。とりあえず今は聞きたいことを聞いておこう。

「んじゃ、あんたもわかっていると思うけど“アレ”はなんだ――ってことを聞きたいんだけど」
その質問に、棟長はふっと鼻で笑った。
何でも質問しろと言っておいて、その態度かよ。なんかむかつく。
「いや、すまない。ボクが答えるまでもなく、君は“アレ”がなんなのか知っているのに、わざわざその質問をしてくるのがおかしかったんだ」
試すような視線。
あぁ、そうだ。俺は“アレ”の名をどこかで聞いたことがある。
(えぇ、そうね、知っている。私は“アレ”が何なのかしっている。この星の外から流れ着いた存在、この世と交わることのない道を持つ者、ソレすなわち――)
「星の外より来たイシ――禁獣」
俺の答えに、満足したように棟長は拍手をする。
なるほど、妹が散々愚痴った理由はソレか。
日澄の中に潜った際に見た光景は、よほどこの星の美的感覚から外れたモノだったのだろう。
「なんでそんなものがココにいるんだよ」
「うん、その話しをするにあたって君に頼みたいことがあるんだ」
なぜかひどく真剣な顔をする棟長。
「どんな頼み？　モノによっては考えるけど」
「それでいい。君は最終的に承諾してくれるだろうからね」
にやりと口の端を釣り合上げた。すごくイヤな笑み。
「なに、それほど警戒することじゃない。ただ“アレ”を君に貰ってほしいんだ」
「“アレ”って――伊頭巻日澄のことか？」
「そう、なぜなら彼女はお上より廃棄処分を命じられているからね」
順を追って話そう、と棟長は咳を一つ。
「まず、君も気になっているところだが、なぜ禁獣がココにいるか――厳密には“アレ”は禁獣では無く、人造禁獣なのだ」

その言葉に、妹がとてもが驚いている。俺も驚く。
「驚くのも無理は無い。だが事実、彼女は飛来した欠片よりイシを取り出し、禁獣としてのイシを移植させた存在なのだよ」
（嘘でしょ、欠片からサルベージなんて、よほど深度の深い異能者が――ってあぁ、だからココなのね）
「だけど、そこまでやってなんで処分なんだ？　お上にバレたら不味い計画だったのか？」
「いいや。この計画はお上主導だよ。だが、彼女は試作品でね。今日見た通り、感情が不安定、いつ暴走するかわかったものじゃない。だから、お上は彼女を処分して、新しいのを作ろうとしているんだよ」
「それで、なんで俺が彼女を貰うことになるんだ？」
「それはね、ボクはまだ彼女を処分するときではないと思っているからだよ」
「なぜ？」
「その前に、彼女がなぜ人の形かわかるかい？」
素直に首を横にふった。
「人は御しやすく、そして始末しやすいからだ。そして、この計画にはどうしても禁獣じゃ人でなくてはならない」
「なんだ、その計画って」
「ふふっ、それはね――楽園の創造（テラフォーミング）だ」
一瞬背筋が寒くなるほどの恐ろしい気配を感じた。
（たぶん、目の前にいる男の狂気ね。しかし、禁獣の能力を使ってだなんて――あぁ、気持ち悪い）
「――今の段階では、お上を含めて夢物語だと考えているだろうけど、ボクはそうは思わない。なぜなら“アレ”のイシはこの星にとどいている！　君も見ただろ、“アレ”が世界を変質させる光景を！　だったらなぜ彼女を処分しなくてはならないのか！　愚かなクソども！　せっかくの希望を潰す気か！」
（バカじゃないの。確かに人の意思である程度制御できても、最終

的にはあっちに決定権があるんだから、無理に決まってる。下手すれば、この星そのものがあんなグロい光景に――いやぁ！）
いきなり人が変わったように叫び始めた棟長。
その言葉に拒絶を示す妹。
はっきり言って付いていけてない俺。
「――おっと、すまないつい興奮してしまった。とにかく、手前上処分したことにすると、次は面倒を見る人がいなくなってね。今まではボクが彼女の保護者役をやっていたものだから、そのまま手元においておくと厄介なことになるんだよだ。それに、ちょうど異能が干渉しあう君に引き取ってもらったら、また何かあった時すぐにでも対処できるだろ？」
と、胡散臭い微笑を見せた。
（ふふっ、これはチャンス。今回の一件で解ったけど、私と“アレ”の力は五分。だったらあいつの“アレ”を踏み台に更なる躍進を――兄さん、ココは引き取るべきです）
己の野心だけで語る妹は黙殺。
（兄さんだって、織華似の女の子が側にいて嬉しいでしょ。側にいればフラグもモリモリ――）
そうだ、そのことも聞かなくては。
「最後に一つだけ。彼女、俺の昔の友人に似ているんだが、本当に違うのか？」
「ん、そうなのかい？　ボクはただ『組織』から下請けした細胞を元にクローンを作成しただけだからな」
「クローン……」
「あぁ、『組織』が禁獣の核を入れるのに適した素材だと言ってな。成長促進の異能者の下で培養された存在だ。彼女はアレでも一年ほどしか生きていないのだよ」
直感的に何かごまかしていると感じた。だが、具体的にソレを指摘できない以上、そうですか、と言葉を打ち切らざる終えない。
「解った。彼女を引き取ってもかまわない――と言いたいところだ

けど、俺今居候している身分なんだが」
「あぁ、そうなのかい。でも問題ない。二人の新居ぐらいこちらで用意しよう」
やった、これであのストーカー女の家からおさらばできる。
「じゃぁ、それで」
まさに即決だった。
「あぁ、任せたまえ」
こうして、交わされる契約の握手。いくつかの隠し事を互いにしているとわかっていながらも、平穏無事に事を終えるための儀式。
だが最後に、棟長室から出ようとした時、
「彼女との子供が出来た時は是非呼んでくれたまえ」
などと抜かされた時は殴ってやろうかと思った。

新しい居場所――ｃｏｍｐａｎｉｏｎ

学園に通い、始めての休日。俺達は新たな住居に引っ越しをしていた。
「しかし、こうも知り合いが集まるとは。世間は狭いね」
直純の言葉に、俺も同感せざるおえない。
ここは『神那荘』。穂邑直純が管理人の、築ウン十年は経っているであろう、トイレ共同風呂無しの、正真正銘のボロ平屋のボロ長屋。
今日から俺達はここで暮らすことになる。

どうしてこうなった、どうしたこうなった（ＡＡ略

と言いたくなる現状。
これには様々な妥協点の結果であることは分かっている。
まず、キーアが俺と暮らしたいとゴネた（これは予想できた）。
次に、日澄が俺と暮らしたくないとゴネた（俺のことをセクハラ魔と勘違しやがった。まぁそれ以前に、どうやら棟長とは仲が悪く、あの人が用意した場所だと安心できないとのこと）。
で、さらに妹が日澄はさっさと殺せとゴネた（当然無視）。
そして、棟長との契約で俺は日澄のそばにいなくてはならない。
すったもんだの討論があった後、最終的には皆一緒の場所で暮らせればいいということになり、キーアが意味不明な行動力を発揮して見つけてきたのがこの長屋だったということだ。
そしたらなぜか、そこの管理人は直純だし（本人は代理だと言っている）、そばに居座っている信子ちゃんはともかく、生徒会長はいるわ、日澄の友人はいるわで、何か作為的な者を感じてしまう。

「キーア、手伝う」
「ありがとうございます、信子さん」
「私も手伝うわよ日澄」
「黒姫、サンキュー」
きゃっきゃうふふと女の子同士で盛り上がりながら荷物を運びこむ様子を横目に、俺は一人疎外感を感じながら雪風と戯れていた。
この一週間の間に三回の引っ越し、しかも私物はほぼ紛失。衣類や洗面具ですらキーアの私物と化し（事情は察しろ）、手ぶらにも等しい状態でここにいる。
しかしこの雪風、白い犬っていうよりも、どちらかと言えば白い狼に見えるのは俺だけか……？
「うん、女の子が増えるのはいいことだ。会長もそう思いますよね」
直純のヤツ、女の子達をほほえましく眺めているが、お前にはかわいい幼馴染がいるだろう。
「僕は丹野（にの）がいるから。ほかの女の子に目移りはできないな」
生徒会長の秋村時矢（あきむらときや）さんは婚約者の名前を出してのろけてくれた。ちなみに丹野というのは、俺に喧嘩を売ってくれた風紀委員ちゃんの名前。
つーか、なんだよ。幼馴染とか婚約者とか。俺の周りにそんな王道属性の女の子いねーぞ。うらやましい！
しかも、キーアと日澄が共同して、俺がセクハラ魔だとかあること無いこと長屋の住人に風潮しやがった（あながち否定できない部分があった）ため、長屋の女性陣の好感度は底辺（一人だけＭＡＸだけどそいつは論外）。
キーアが計画通りとほくそ笑んだ時は殺意すら沸いた。
「俺も世話になるんだけどな。それに、これ以上引っ越すような事件が無いことを祈っててほしいところなんだが」
「ははっ、たしかに。でも、ここの前管理人から頼まれたことなんだが、ココで暮らすヤツらは皆家族みたいに扱えって言われててな。俺も、ココには思い入れがある。もし、なんかあったら手助け

ぐらいしてやるよ」
「うん、僕も自警団の一員としてだけじゃなく、ここで暮す仲間として手を貸すよ」
「二人とも……」
なんだろう、この、心にじーんとくるものは。
今まで師匠と暮していたため、人情というものとは無縁だった故に、すっかり忘れていた感情だ。
うん、ここにこれたことは幸運だったのかもしれない。
「ナオ」
いつのまにか女性陣の引っ越し作業は終わっており、信子ちゃんが声をかけてきた。他の女性陣もそろっている。
「おう、じゃぁ新しい住人達の歓迎会でも始めますか」
その言葉に、黒姫（本名は教えてくれなかった）が待ってましたとばかりに酒瓶を取り出す。
直純と日澄がひゃっほーとハイタッチ。
「ちょっと、黒姫さん。さすがにお酒は――」
さすが生徒会長にして自警団員。模範的な意見ではあるが――
「まぁまぁ、こんな日ぐらい硬いこと言いっこなしッスよ」
管理人である直純の意見に一同が賛同し、マジメな生徒会長はしぶしぶ従うのであった。
「よっしゃぁ！　おーい、信子。雪風のメシも用意してくれ」
雪風という単語に一瞬凄いイヤな顔をしたが、さすがにめでたい場で文句を言えるわけもなく、仕方が無く準備にとりかかる。
かくして神那荘の裏庭にて、たくさんの食事と酒を囲んで始まる大宴会。無礼講で皆一日中騒ぎに騒ぐ。
そして最後に、全員が口を揃えてこう言ってくれた。

「「「ようこそ、神那荘へ！」」」

新しい居場所――ｃｏｍｐａｎｉｏｎ（後書き）

どうでしょうか、ここまでが物語の序章的な部分です。
ここから先は毎日更新できるかどうかあやしいところですが、どうか見捨てずお付き合い下さったら幸いです。

妹ちゃんの今まで出てきた人物紹介――Sense of sister

黒い星が浮かぶ空。
朝と夜同時に存在しているその世界。
草原の海で寝転ぶ少女。
見上げた先に見るのは、いつもの空ではなく、浮かんでは消える幾つかの人の顔。
彼女は思う、新たな環境に変わり、兄が出会った人達のことを。彼らが兄にどのような影響を与えるのか、自身の望みにどのように影響を与えるのか。そして、思いの敵になるのかを。
彼女は瞼を閉じて再び思い浮かべる。兄の記憶から掘り起こし、自身の世界にかたどる人の姿を。
さてまずは――

■◇■◇■

萩島隆道（はぎしまたかみち）。
能力名　裏方仕込の大舞台（デウス・エクス・マキナ）。

言わずもながらの人物、私の兄である。容姿は、本人は平凡普通などと抜かしているが、私と血を分けているだけあってイケメンの部類に入っている。もっとも、それを指摘したところで私の話しは聞いてもらえないのだが。
昔からおバカではあったが、頭の回転が悪いわけではない。ただ、意図的に理解しようとしないだけ。本当はすごいヒト。本当だよ。絶対だから。私が言うんだから間違いない――（この後つフォローにならないフォローが約ウン十行にわたたって述べられるが、カット）

。

私が住み着いてしまったことにより、感情の一部が欠損――と言うと語弊があるが、鈍いのは確かで、傍から見ると問題行動を起こしているように見えることがある。ちょっと反省。

マンガやゲーム大好きな二次元オタク。いつかは二次元で語られるような純愛をしてみたいと思っているが、一生こないと私は断言する。

織華との関係は、幼馴染と言うには付き合いが短く、三度ほどしか顔をあわせていないにもかかわらず、その内の二度は喧嘩（しかもその内一度はガチの流血沙汰）で、結局どうやって仲良くなったのか私には理解できない。

本当は異能者ではないのだが、私が住み着いているのでそう判定される。ちなみに能力は私の異能を行使できることである。しかし、多様すると私と融合してしまうため、兄さんとしてはイヤだろうし、私も避けたいところ。

桜河（さくらがわ）キーア
能力名　魂の侵略者（ソウル・クラッカー）

目下私の最大の敵。兄さんにストーカーを仕掛けている大迷惑人である。

金髪巨乳という、兄さん好みの容姿を盾にやりたい放題。兄さんも、嫌だ嫌だといいつつ、満更でもないところがまた何とも言えない。

性格はいまいちつかめないところがあるが、基本は一途。兄さんのためならマジ命賭けるほどだろう。だが、ひと目惚れ――というよりは、探究心に近い部分もあると私は感じるが……？

彼女の異能は他者の意識への干渉。一口に干渉といっても、記憶の共有（シンクロ）に引出（ダウンロード）、さらには人格への操作（ハッキング）、さらには意識の停止（シャットダウン）といっ

た、まるでコンピュータウイルスの人間バージョンようなもの。でも、私の方が上位の存在なので、兄さんには効かない。ざまぁ。

伊頭巻日澄（いずまきひずみ）
能力名　異星へ書き換える力（ワーニング・テラ・ホーミング）

目下私の最大の獲物。いつか喰ってやって、私がこいつの持つ異能に成り代わろうと思っている。
兄さんの友人である織華とそっくりな容姿。彼女はクローンであるが、遺伝子提供元が織華かどうかは定かではない。
性格は無駄な正義感を持った勘違バカ。煽り耐性が無いため、少しいじると面白いことになる。兄さんに抱きつかれたことはいまだに怒っているらしく、そのことを周囲に言いふらして兄さんのカブを下げている。粘着うざい。
イズマキ統合特設病棟で生まれたため伊頭巻の苗字をつけられている。病棟で育ったくせに病棟の連中とはソリがあわず毛嫌いしている。特に棟長とは特に仲が悪いらしい。
彼女に植えつけられている禁獣としての意思によって、この星を別の星の形へ変質・変換させる恐ろしい能力をもっていて、私はソレがほしい。

穂邑直純（ほむらなおずみ）
能力名　空ろの殻

兄さん達が暮らす『神那荘』の管理人代理。兄さんがこの街で出来た始めての友達でもある。
兄さんはイケメンと言うが、私的には兄さんが一番である。
面倒見のいいあんちゃんな性格であるため、人見知りの兄さんも

気楽に付き合うことができる貴重な存在。

兄さんと二次元のことで語り合えるイタい部分があり、更には愛犬に擬人化を望むヘンタイでもある。幼馴染がいるのに、彼女をないがしろにしているところが兄さんの恨みを買っている部分でもある。

夏海信子（なつみまことこ）

能力名　紫煙の鉄猫

直純とは幼馴染。ついでにキーアの本性を知っていて尚友達付き合いができる変人。

容姿は、ロリ担当。以上。

なぜか兄さんは恨まれているし、口数少ないし、しゃべれば言葉は悪いしで、あんまりいい感じはしない。

ちなみに、両親が救世主教（メシア）（ここで言う救世主は外のヒトを殺し、異能者だけの世界を作る悪魔的存在）の信者で、街で悪魔騒動が起こったことで救世主教（メシア）が活発に活動をし始め、コレ幸いとばかりに家出を決行。思い人である直純の家に転がり込んだ。直純の愛犬とは文字通り犬猿。

雪風（ゆきかぜ）

能力名　幻視幻想（イマジナリー・ビジョン）

直純の飼っている白狼。兄さんは気がついていないが異能者である。

周囲には能力で犬として認識させているが、兄さんにだけはしっかりと狼としての姿が見えている。それは私の存在が、兄さんに直接干渉する能力は全てシャットアウトしているから。でも、なぜ周

囲に犬として認識させているかは謎。
直純にだけでなく、兄さんにまでなついているため、信子の言うようにビッチの可能性がある。

秋村時矢（あきむらときや）
能力名　連結した蛇と熊（オーガ・キメラ）

『神那荘』の住人。学園では生徒会長で、外では自警団員をやっている。しかも本部所属。でも悪魔騒ぎで支部に駆り出された。髪の毛を赤に染めて、一見不良っぽくみえるが、物腰柔らかで口調も丁寧人当たりもよい。どうして髪を染めた。
婚約者もちで、兄さんはすごくうらやましがっていた。

東雲丹野（しののめにの）
能力名　局地的災害（プチ・カラミティ）

兄さんに喧嘩を売ってきた子。でも返り討ちにあってざまぁ。
学園で風紀委員長をやっており、三つあみおさげで、一見まじめっぽく見えるくせに、態度は悪いわ口は悪いわで残念感がすごく漂う。やっぱり眼鏡っ子じゃないのがいけないのか。
自警団本部所属だけ、時矢と一緒に支部へ。ちなみに時矢の婚約者はこいつ。

黒姫（くろひめ）
能力名　空を切り裂く血の刃
『神那荘』の住人。日澄の友人でクラスメイト。

黒姫という名前は芸名らしく、ただいま売り出し中のグラビアアイドルをやっている。
シモネタ連発の下品な性格。酒が弱いくせに酒好きで、よく吐いている。
黒という名を使っているが、本人は白子ちゃん。病的なほどにガリガリな体格だが、それがマニアにはウケているようである。

■◇■◇■

黒い星が浮かぶ空。
朝と夜同時に存在しているその世界。
草原の海で寝転ぶ少女。
——ふぅ。
コレまで出会ってきた印象深い人物達を思い返し、少女は一息つく。
出会った人達の中で、まだいくつか思い返していないのもあるが、彼女にとってはコレで十分だった。
さて、この先、彼らはいったいどうなるのか。
少女にとってもまだまだ目の離せないことである。

妹ちゃんの今まで出てきた人物紹介――Sense of sister（後書

各人物のプロフィールは全て妹ちゃんの主観で語っているため、本来の設定と食い違っている部分があります。

あと、能力名は妹ちゃんが勝手につけており、本人達（隆道以外）は別の呼び方をしています。

二人で歩く街並み――Ｄａｔｅ

ある晴れた日の休日のこと。

「……待たせたわね」

むすっとした顔つきで神那荘から出てきた日澄。

本当、随分と待たされたよ。おかげで暇つぶしに雪風の相手をしていたらべろべろに舐められたから、一度顔洗いに行ったぐらいだ。

「なによ、その顔。不満ならいいのよ別に」

「んなこと言ったってなぁ」

神那荘（ココ）に引っ越してきてからというもの、俺と日澄（主に日澄）が毎日のようにどたばたしていたため、これからの神那荘のことを考えると、俺らの関係は改善しなくてはいけないという点が浮上してきたのだ。

たとえば、俺が信子ちゃんや黒姫と話しをしていると、日澄が火炎放射器（スプレー＋ライター）で汚物は消毒だー！　をリアルでかましてきたり、俺がキーアに絡まれていると、１００ｔハンマー（偽者）を召喚したり。

そんなことがあり、タダでさえボロい神那荘がこれ以上ダメージを受けるとヤバイため、俺たちの仲を改善しろとのお達しをうけて、神那荘で行われた全体会議の総意（キーアは血涙を流していた）の元、俺と日澄、二人で遊びに行くこと（つまりデート）が決定された。

が、日澄はゴネまくり、さらにはつい今しがたまでゴネていたことを知っている。なにせ壁が薄いため、本人は内緒話しのつもりで話しているのだろうが、めちゃくちゃ嫌がっていた声がで聞こえていたからな。

「つーか、お前はいいのか？」

「しょうがないでしょ、皆が仲良くしろって言うんだから。今日は

仕方が無く貴方に付き合ってあげるわ」
……なんだろう。コイツを素直に(ツンデレ)なれない子っぽく見ないと、やってられない気分になってくる。
「それじゃ、行きましょうか」
「しっかりエスコートしてくれるんでしょうね」
「おいおい、俺、ここに引っ越してきて日が浅いんだぞ。女の子と二人で遊べる場所なんて知るはずが無いだろ」
「私だってイズマキから外に出て日が浅いからそれほど街のことなんて知らないわよ」
沈黙が訪れる。どうやら互いに相手任せのプランだったようだ。
「……それなら、とりあえず街へ出て探してみるか」
「それがよさそうね」
こうして、行き当たりばったりの計画で繁華街へくりだすことになった。

この真織市の移動手段は徒歩か自転車か電車。車は地位のあるヤツしか所持していない。
ちなみに、北側には北側全体をカバーするように環状線の地下鉄が通っているため、俺達をはじめ、北側のほとんどの住人がコレを移動手段として利用している（なにせ定期を買うと電車乗り放題だからな）ので、自転車を乗るやつは少ない。
あと、南側はほぼ田園地帯となっており、電車は通っていないどころか、同じ市内かと思えるほど様変わりしているらしい（時矢情報）。
「あのさ、前から聞きたかったんだけどさ」
移動中の電車の中、ぼけーっとしていた時、隣で座っていた日澄が問いかけてきた。
「貴方って、キーアと付き合ってるの？」
「それは無い」

「即答ね。あれだけ仲が良いのに」
「あれで仲が良いと見えるのなら、俺はお前に眼科を勧めるぞ」
「でも、あんたとキーアってよく漫才やってるじゃない」
「周囲がアレを漫才と捉えるからキーアが付け上がるんだ。俺は本気で嫌がってるっての」
　肉体接触系イベント以外は。
「なんか言外に含むような言い方」
　鋭い。
「――とにかく、容姿はともかく性格が俺の好みじゃないの。だから付き合うことは一生無い」
　おしとやかなのは好みじゃないのかな？　などとつぶやいているが、ソレはキーアがネコかぶってる時だっつーの。
「じゃぁ、信子ちゃんか黒姫が狙い？　最近よく話しかけてるし」
「あのな、そりゃお前が俺の評価をどん底に叩き落してくれたからフォローしてんだよ。それにあの二人は逆に容姿がなー。幼女と白子だろ。さすがにそこまでマニアックな趣味は無い」
「貴方、本人達に聞かれたら怒られるわよ」
　いや、むしろお互い容姿（ソレ）を売りにしてるところがあるような……
「あっ、そ、それじゃぁ、貴方の好みって、もしかして……？」
　私？　と目で問いかけてくる。
　うーん、こうして見ると本当に織華にそっくりな外見だけど……
「ちょっ、なにじろじろ見てるのよ。本当にそうなの！？」
「いや、お前も性格がちょっと残念だから、ごめんなさいだな」
「残念ってなによ！　だいたい、私だって貴方と付き合うなんてごめんなんだからね！」
　ふんと明後日の方向を見る。
　しまった、今回の企画の趣旨は仲良くなることだったっけ。
　でも、この気難しいお嬢さんと仲良くって、どうすればいいんだ？

「さて、繁華街にやってきたが、どうする」
「私、お腹が空いた」
電車の中でのことを引きずっているのか、むすっとした表情で言ってくる。
「なら、うまいラーメン屋を知って――いたっ」
尻を蹴られた。
「あのね、仮にもデートでしょ。なんでそんないかにも学園帰り、みたいなノリなのよ」
「つったってなぁ。じゃぁ、お前は何が食べたいんだよ」
「私？　私はお好み焼きが……」
と、そこまで言った時、俺がジト目で見ていることに気がついた日澄はハタと我にかえると、慌て両手をふりまわし×をつくる。
「今の嘘！　じょーだん！　そうね、せっかくだしオシャレな店を探しましょう！」
言うやいなや日澄ずんずんと先を歩き出す。俺は、ため息を一つつきその後を追った。
――で、結局なにを食べたかというと。
「……悪かったわね」
「別に」
二人でファーストフードでハンバーガーを買って、歩きながら食べていた。
考えてみれば、俺達それほど金を持っているわけではないのだ。俺は市からの保護支給（外からやって来た異能者に対して三年間は市から一定額の援助金をもらえる制度。だが、将来援助された金は返さなくてはならない）頼りだし、日澄は棟長からの援助を受けているが、その金には手をつけたくないらしい（本人曰く借はなるべく作りたくないとのこと）。
「どーしよう。お金が無いって気がついただけで、いっきにやることが無くなった気が……」
「お前の中のデートは、金を使うことしか無いのか」

「じゃぁ、貴方は何か案があるの？」
「いや別に、その辺ぶらぶら歩くだけでもよくないか？」
「ダメよ、ダメ。ほしいの見付けちゃったら、買いたくなるじゃない」
「お前、堪え性がないもんな……」
本人にも自覚があるのか、うっ、と言葉を詰まらす。
「だけど、せっかくここまで出てきたんだ。このまま帰るのも無いだろ」
「それもそうね……じゃぁ、なるべく欲しい物が目につかない場所を歩きましょうか」
それはどこだよと突っ込みたくなるが、とりあえず俺と歩くことに異論は無いらしい。
こいつ、本当に素直（ツンデレ）になれない子なんじゃないだろうか……
それから二人で繁華街を歩き、いろいろな場所を見て回る。
お互い知らない場所が多いため迷子になったり、看板の無い店を見かけるたびにどんな店か二人で予想をして騒いだり、その中で見つけた古い家具や用途不明な道具を扱う骨董屋（俺の趣味）を覗いたり、鉈や鋸といった日用品から刀剣まで扱う刃物屋（日澄の趣味）を覗いたり、お互いの趣味のおかしさをバカにしあったり、と、なんだかんだで夕方近くまで金を使わず時間がつぶせた。
「ふぅ、意外と楽しかったわ」
「そりゃよかった。コレをきっかけに神那荘でも仲良くしてくれると嬉しいね」
「あのね、私だって好きで怒ってるわけじゃないのよ、貴方がセクハラ魔なのがいけないんじゃない」
「それは誤解だっつーの。今日だってお前に手だししなかっただろう」
「そうね、確かに誤解だった。うん、いろいろとごめんなさい」
「ん、分かってくれればいいよ。それじゃ、今日の企画は成功ってことで、帰りますか」

「そうね」
いい感じにまとまったところで二人、帰路に着く。
行きに来た道を戻るだけの帰り道。それだけだと思っていたが、そうは世の中そうは問屋がおろさなかった。
この後、のちに『地下鉄の悪魔事件』と呼ばれる事件に俺達は遭遇するのであった――

事件の始まり――Post meridiem 5:36

昔、悪魔を見たことがある。
言葉巧みにヒトを惑わし、狂わせ、最後には命を奪っていく男。
血の海と死体の山を作り上げ、その恐怖を周囲に知らしめた存在。
幼く弱かった自分は、その存在を目の前にしたとき羨望を喚起させた。
だが、最後の最後で師匠に首を切り落とされたその男は、結局ただの殺人鬼だった。

「いっつー、なんだ……」
ひどく痛む頭と、なんだかとても酷く懐かしい夢で目が覚めた。
なんの夢を見たか思い出そうとしたら気分が悪くなったのでとりあえず忘れておくことにする。
「……さて、この状況はどういうこった」
目の前が真っ暗。比喩でもなんでもなく、本当に目が見えと勘違いしてしまうほど光がなかった。しかも、なんか火薬と血が混じった懐かしい匂いもするし。地下鉄内で何かあったのか？
思い返してみれば、最後にある記憶は日澄と一緒にホームで待っていたときに聞いた、ホームに響き渡る爆音と衝撃、遅れてホーム内に蔓延した埃混じりの煙。そこで記憶は途切れていた。
「そういえば日澄は大丈夫か――」
「おや、おにーさん、よくお目覚めになりましたね」
突然軽い口調で聞こえた声に、どこにいるかも分からない相手に身構える。
「おにーさん、逆、逆っすよ。俺っちはこっち」
「どこだよ。つーか、なんで位置がわかる？」

「俺っちの眼鏡、ピピーっと波が流れて黒い部分に画面が見える特別製。だから真っ暗でも関係なし」
　よくわから説明。まぁ、とにかく相手からは俺が見えているんだろう。
「そんじゃ、この状況どういう状況かあんた説明できるか？」
「できるせぇ。何せ、ここ爆破したの俺っちだからな」
「なっ」
「ははっ、俺っち誰かに顔見られるとまずいから手当たり次第に持ってた手榴弾投げ込んでさ。照明やらなんやらを破壊するついでに、ヒトまで破壊しちゃった」
　てへっ、と本気でふざけた口調で言う男のセリフに腹が立った。
「どーしてくれるんだよ、学園通うのに電車使ってたのに。間違いなく運休だろ、これからしばらく徒歩じゃねーか」
「おにーさんの懸念はそこっすか。その件に関してはすみませんと言うしかない！　でも本気で反省しているわけではない！」
　なんだか完全にクスリをキメちゃったっぽいテンションの男。外にいたころにも何人か出会ったことがあるけど、何回話しをしててもなれないな。相手のテンポが独特すぎてついていけないのだ。
「そいえば、爆破のとどかなかったやつとかいただろ。その辺はどうしたんだ？」
「あぁ、その変も問題なしっす。ホームから逃げようとしたり戦おうとして動いたやからは全員俺っちの武器(エモノ)をブッ刺しておいたから。あと出入り口も爆破したから。コレでだれも俺っちの姿は見ていない、完璧！」
　ケラケラと笑う狂人。やばいなー、俺、ここで殺されるか？
「おにーさんは運がよかった！　爆破の直撃も受けずただ気絶していただけなんて！　もし暗闇じゃなかったら俺っちの武器(エモノ)が火を噴いていたところだったぜぇ」
　本当に運がよかったのか怪しいところだが、まぁ、ここでこの男の標的にならないのならいいか。

「誰にも見られたくないのなら、なんで地下鉄(ココ)に来たんだよ。俺としてはいい迷惑だぞ」
ちょっと前までいい気分だったのに、いろいろ台無しだ。それに、本気で日澄が心配になってくる。あの女、意識があったら間違いなく目の前の男に喧嘩を売っているだろう。
今はただ気を失っているだけだと願うしかない。
「んー、俺っちも別にココに顔を出したかったわけじゃないんだけどさ、いやー、まいったまいった、ほら最近話題の悪魔さんっているじゃないッスか。アレとねぐらがバッティングしましてね、思わず喧嘩になっちゃったんデスヨ！　コレが！」
その状況を思い出したのか、興奮した口調でなにやらガチャガチャを音を立てて騒ぎ出す。
「それにウワサになるだけあって、強い強い！　俺っちも本気を出そうか考えたもん」
なにかゴトンとモノを置く音がする。そしてまたガチャガチャという音。
「ちょっと待ってくれ。悪魔って、どこで会ったんだ？」
「お兄さんから見て右側の線路の奥の方。ちなみに俺っち今追われてる」
「それってつまり――」
「うんむ。多分ココに来るでしょ。だから俺っち、ココを本格爆破して足止めするため今爆弾をセッティング中」
それでさっきからなにやらガチャガチャ音がしていたのか。
「それはつまり俺を巻き込む気か」
「せっかく生きてたのにゴメンねおにーさん」
「ふざけんな――といいたいけど、あんたとかかわりたくないから、口にチャックして黙っておこう」
「ヒャハハア！　おにーさん、面白い！　ここまで話しが出来るヒトも珍しいし、また会いたいな！　よし、コレをプレゼントしよう！」

ガンと頭に衝撃が走る。そしてころころと転がる音。ソレを手に取ってみると――

「――懐中、電灯？」

「イエス！　俺っちの予備を上げちゃうぜ！　あ、でも今はまだ電気つけないでね。顔見られたら殺さなくちゃいけないから」

その言葉に素直にうなずいておく。俺もわざわざこんな狂人に喧嘩をうる意味を持たない。

「――よし、セッティングオッケイ！　それではおにーさん、俺っちはココで退散したいと思います！　最後におにーさんの名前教えてくれるとうれしーな」

「そういう場合は、自分から名乗るのが常識だと聞くけど」

どうせ、向こうも名前を教える気は無いだろうと思い言ったセリフだが、

「おっと、いっけね。俺っちとしたことが。そうだな、名前を聞くときは自分から名乗る。ジョーシキ。うん、俺っちの名前はイズマキジンって言うんだよ」

コイツ顔を見られたくないくせに、素直に名乗りやがったぞ。

でも、本名か偽名か――本名っぽいな。

「俺は田中太郎だ」

当然、俺は偽名を名乗っておくが。

「じゃぁ太郎くん。俺っちは悪魔さんとは逆の方へ逃げます！　キミも来たら当然殺し合いだから覚悟しておいてね！」

そう言うやいなや、スタタタタと軽快に走り去る音がした。どうやら本当に立ち去ったようである。

さて、俺はこれからあの狂人か悪魔のいるルート、どちらかを通らねば帰還出来ないのか。

妹の能力はこういったところではまったく役に立たないからな。なんでも出来るなんて謳い文句、詐欺同然じゃないか。

ふざけんな。といろいろな方面に罵りながら、とりあえず今は懐中電灯の明かりをつけて日澄の安否を確かめるのであった。

隧道のとある過去――Post meridiem 6:05

真っ暗なトンネルの中、懐中電灯の灯一つを頼りに地下鉄の線路の上を日澄と歩く。

「大丈夫か？」

「そうね。貴方が殴ってくれた頭とお腹がまだ痛むわ」

しばらく会話がなかったため何気なく聞いてみたら、今だに根にもっているのか、皮肉が返ってきた。

なにせ、日澄は地下鉄のホームで爆煙から出てきた男を目撃した瞬間、俺に殴り倒されて気絶させられたと言う。そのため、起こしたらえらい報復にあった。でも、俺にはそんな記憶にないいんだけど。

まぁ、多分無意識下で妹(アレ)が反応したのだろう。

でも、それでよかったと今は思っている。日澄がもしあの男と対峙していたら、間違いなく殺し合いになっていた。しかも日澄は自我によって禁獣を封じているため、能力が発動せず確実に日澄が殺されている。

突然背後から、ドドーンと爆発音が響きわたった。

どうやらあの男が仕掛けた爆弾が爆発したようだ。あの後、懐中電灯で時限爆弾を調べてみたらなぜか三十分後に爆破されるようにセットされていた。そのため、地上へつづく通路を調べたり（当然、階段もエスカレーターもエレベーターも全て潰されていた）、こうやって爆破に巻き込まれないための距離を歩けたりと何とかなったのだが――

「はぁ……」

爆発音を聞き、安堵を混ぜた疲れたため息を吐く日澄。

「……取り合えず、休憩でもするか」

さすがにどこまで歩けば助かるのかわからなかったため、ここま

で強行軍で歩き続けた。爆破から助かった今、ここいらで休憩をとるのが得策だろう。
なにせ、この後、ウワサの悪魔とのエンカウントが待っているのだから。

二人壁にもたれかかり大きく深呼吸。
「はぁ……」
再び日澄が疲れたため息を吐く。
「おーい、マジで大丈夫か？　まだまだ歩くんだぜ」
「そうなんだけどさ……やっぱり、あの光景はちょっと堪えた……」
あの狂人に立ち向かったり逃げようとしたりで殺された人達の姿を思い出してのことだろう。
明らかに狙って、心臓と頭を粉砕されていた。
どんな異能者とはいえ、ベースが生身である以上、道に繋がる“魂”の器である『心臓』と、道から得た能力処理を行う『脳』を破壊すれば、どんな能力を持っていようと確実に能力の使用は不可能になると聞いたことがある。
「お前も見慣れてるんじゃないのかよ」
「そりゃイズマキ（あそこ）にいた時はイヤでも目にしてたけどさ……」
あの人体実験場にいたら、異能者の解体シーンの一つや二つ余裕で見てるだろうし平気だと思ってたんだけど、以外に重症っぽい。
「でもに、もしかしたら私達みたいな人がいて、さっきの爆発だって助かったかもしれないでし……」
たしかに、俺達みたいにただ気絶していたヤツもいたかもしれない。だが、俺達は自分達が助かるために、人命の安否の優先より脱出経路の確認を優先させた。なにせ、俺達は空を飛ぶ能力をもっていない。壁を破壊して道を作る能力を持っていない。だったら、逃げるためには歩くしかない。
もしかしたら、あの中で誰かが生きていて、歩かずにあそこから

抜け出せる能力を持っているヤツがいたかもしれない。だが、たった三十分の猶予の中、生きているヤツを探して、そして脱出できる能力を持っているヤツを見つけるなんて、奇跡にも等しい賭けを行えるわけが無い。

　だったら、地上への脱出経路がないとわかったら、なりふりかまわず爆破に巻き込まれないようにあそこから逃げ出すしか選択肢は無かったはず。そしてその選択を選んだからこそ、今ここに生きていられると俺は思う。

「お前の気持ちは——正直言って今の俺にはわからん。死に対して怒ったり悲しんだりする（そういうことを）のは身内で十分だろ。お前だってこの世界で死んでいくヤツら全てに悲しんだりしないだろう」

「そうなんだけど……なんかドライね」

「でなきゃ、師匠の後をついていけなかったし」

「あなたの師匠って何者よ……」

「対異能者捕縛機関（エクセス）の上級幹部。しかも異能者始末部隊の隊長だ」

「うっそ……貴方、対異能者捕縛機関（エクセス）の関係者なの？」

　今、日澄の顔を照らせば間違いなくげっそりとした顔をしているだろう。

　対異能者捕縛機関（エクセス）——文字通り外においての異能者を捕まえる機関なのだが、これがまた、異能者に劣ることの無いバケモノ揃い（そう、異能者ではなくただの人間の集まり）の組織なのだ。一人殺せば殺人者でも、百人、千人殺せば英雄を地で行く人間の集まりの中、そして俺の師匠は間違いなくその類の『英雄』だ。

「師匠は俺を仲間に引き入れたかったんだろうな」

　でなきゃ、異能者や異獣病の事件が起こるたびに、足手まといの俺を現場まで引き連れていくわけが無い。

「でも貴方、異能者でしょ。入れるわけ無いじゃない」

　確かに異能者よりヤバイ連中の集まりのくせに異能者排他主義だからな。

「まぁ、厳密に言えば俺は異能者じゃないから」

その言葉にえ？　と日澄が驚く。たしかに驚くだろうな。
「俺の能力は俺のじゃなくて妹のものだし――って、なんでこんな話ししなきゃならんのだ」
「いいじゃない。この際だし」
どの際だ――とは思ったが、日澄の気を紛らわせるぐらいにはなるかなと思い、とりあえず話してやることにした。
しかし、相手が始めから知っていたとか、気がついたとからなまだしも、自分から能力に関して話すのは初めてだな。どうやって話したらいいものか。
「うーんとだな、妹と俺の心臓を交換させられたんだ」
そう、今でも思い出すだけで腹が立つ。俺の心臓をえぐって取り出し、喰らい、あまつさえ俺に自分の心臓を埋め込んできやがった。
「で、あいつの能力は世界への融合も含まれているから、俺の中に住み着いているの」
そこから更に先を目指しているようで、俺を踏み台に使い、さらには日澄を狙っているようだが、また関係を拗らせたくないし、俺もさせるつもりは無いから、ココは話さなくてもいいだろ。
「だから、異能者の妹が俺の中にいるだけ。俺は真っ当な普通の人間」
「？？　よく意味がわからない説明ね？」
「えー？　師匠は部隊の面子に俺のこと説明する時、こんな風に説明して皆を納得させていた気がしたんだが……」
「あのね、私それほど世の中に精通しているわけじゃないの。そんな大雑把な説明で理解できるわけ無いでしょ」
「まぁ、とにかく、俺は異能が使える普通の人って覚えてもらえばいいよ」
「なんていい加減……」
「妹に言わせれば、俺はバカだからな」
「まぁ、それはたしかに納得できるわね」
ははっ、日澄が小さく笑う。どうやらオチは付いたようだ。

「よし、休憩も出来たことだし、そろそろ行きますか」
「——そうね」
俺達は立ち上がると、再び暗闇の世界を歩き出した。

悪魔出現――Post meridiem 6:12

その姿を見た瞬間、俺は間違いなくやはり悪魔などいないと思った。

懐中電灯の明かりに照らされて、俺たちの目の前にいるのは明らかに異獣病と思わしき存在。

左腕を大木のように肥大化させ、下半身からは足蜘蛛のように八本の足が生えているだけの姿。これで悪魔などというのだから世の中の基準はやっぱりおかしいと思う。

「……あれが、悪魔？」

「だろうな」

ついでにあの狂人が三十分などと猶予をもって爆弾をセットした理由もわかった。何せ目の前の悪魔は手負いだ。血を流し、線路のど真ん中で休むように丸まっている。

この悪魔（仮）が狂人を追ってきたら、あの爆破に巻き込まれる程度に遅いスピードしか出ないのだろうと思う。

だったら、もし襲ってきても逃げ切れるかもしれない。

「どうするよ。寝ているか起きているか分からんが、このまま横を通って大丈夫か？」

「私が知るわけがないじゃない。でも、この先を進まないと帰れないわよ」

「だよな」

選択肢など始めから無かった。

「じゃぁ、行くぜ」

「ん」

若干俺の腕をつかむ日澄の手が震えているが、気がつかないフリをしておく。

そして、ゆっくりと悪魔（仮）の隣をすり抜けようとした時――

「――！！　日澄！」
悪魔（仮）が俺たちに向かって腕を伸ばすイメージが脳裏によぎる。
咄嗟に日澄を突き飛ばすが、当然俺はその場から動けず――
「ぐはっ！」
イメージ通り、肥大化したその左腕が俺を掴み地面にねじ伏せてくる。
なんつーか、俺、こんなのばっかじゃねぇか……？　と思ったら、
「ぎゃおぉぉ！」
なぜか悪魔（仮）の方がもがき出した。そのため腕の拘束も外れ俺は咄嗟にその場から離れ、日澄の元へ駆け寄る。
「ぐぎょわぁのぐの！！」
真っ赤な血を流し、のた打ち回る。
「傷口が開いたのかしら？」
「だろうな。でも、これがチャンスだ」
「貴方、ダメージは？」
「問題ない、ここを抜けるぞ！」
もがく悪魔（仮）の脇めがけて俺たちは駆け出す。
だが、このときふと疑問が脳裏を掠めた。
この程度の相手に、あの狂人が強いだの悪魔だの、本気で言っていたのだろうか。
雰囲気でだが、悪魔（仮）があの狂人の相手が勤まるとはとても思うことが出来ない。だったら、なにがあの狂人をあそこまで追い詰めたのか――
「ぐぎょごごぎゃぐぉぉぉぉ！」
俺たちがちょうど悪魔（仮）の背後に回ったのと同時に、悲痛な叫びと交じりにのた打ち回り暴れ始めた。なにやらただ事ではない苦しみ方。どうしたのかと振り返り、明かりを照らせば――
「何！　アレ」
ソレは俺が聞きたかった。

まるで、蛹から蝶が羽化するように、きぐるみから中の人が出てくるように、悪魔（仮）の背中からこの暗闇より黒い影が這い出ようとしていた。

そして、俺たちは知った。黒い影が[redacted]だということを。

それはつまり、本物の悪魔という存在がこの世に顕現するということに他ならなかった。

いきなりですが、最終回です

隆道「ちょっとまてー！　どういうことだ、無期限の凍結じゃなかったのか！」

日澄「そんなの、実質は書くの辞めた宣言じゃないの」

隆道「いや、たしかにそうだけどさ、だからってなんで最終回が座談会なわけ！？」

キーア「まぁ今回の趣旨は、発表出来なかったっけど一応あるＡｎｔｉ　Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ａｎｔｉの構想のネタバレをこの場を借りて言っちゃおうということなので」

隆道「くそっ、いくら作者がリアルでつまらないと知人に斬って捨てられたからって、これは無いだろ。せめて、アレから何年たった――とかのモノローグから入って、ストーリー上でトークをするとかあっただろ」

日澄「確かにあったけど、作者のモチベーションが完全に途切れたし、もう一つの作品の方に力入れたいらしいし、いちいちストーリー調で語るのはめんどくさかいって言ってたわ」

キーア「ですが、一応知人からはどんな形でもいいから完結させろと言われたので、読者様のお叱りを覚悟の上でこのような形で終わらさせていただこうと思い立ったようです」

隆道「なんだかなー。だけど、やっちまったもんは仕方が無いか。」

で、ネタバレって、結局何するんだ？」
キーア「そうですね、まずはストーリー大筋でも語りましょうか」
織華「今やってる地下鉄の悪魔編の後は、期末テスト編、夏休み編、日常をちょこちょこ挟んで——その後って考えてたの？」
キーア「おぼろげに。ですが、その辺りを書いているころにはいい案が思い浮かぶだろうと考えていたようです」
世界「でも、最終編は考えていたらしいよ？　ちなみにラスボスは私」
隆道「いきなり出てくるなよ！　お前、本編で名前出て無いどころか、この世にいないだろ！　ついでに『犯人はヤス』みたいな口調で言うなよ！」
世界「兄さんもいろいろ突っ込み大変だね。でも、ココは何でもアリなんだから気にしない気にしない。あっ、ちなみに私の本名は萩島世界っていいまーす。始めまして！」
隆道「……そういうことで、コイツが俺の中に住んでいたバカ妹です」
キーア「まぁ、私は知っているんですけどね」
織華「私知らない」
世界「そりゃ、最終編で満を持して出てくるんだから当然じゃない」

直純「しかし、ミッチの中にいる世界ちゃんがどうやって出てくるんだ？」

信子「気になる」

隆道「お前ら、いきなり出てきたな……」

直純「だって、ただでさえ登場人物多いんだ、強引にでも出てこなきゃ出番がなくなるだろ」

隆道「だからって、信子はいらないだろ。ただでさえ口数が少ないキャラなのに、相槌だけなんて、どう考えたって尺の無駄使いだ」

雪風「わんわん」

隆道「言ったそばから！？」

世界「はいはい。兄さん、話しが脱線してる。ちなみにどうやって私がラスボスになるかっていうと、実は病院のとある場所で眠っていた織華（イズマキ）と合体するの。それで、兄さん&日澄ペアと戦う予定だった」

黒姫「合体ってR－18がついちゃうような――！？」

隆道「変な釣り針にひっかかったクマー！　つーか、ありえんだろ！？」

キーア「ですが、黒姫さんが主軸の話しではR－15ぐらいのシモネタ回をやろうかと考えていたらしいですよ？」

隆道「マジか……しかし、織華、イズマキにいたのか」

キーア「豪快にばっさりとカットした、学園に転入する前日の話しのところで、実は隆道さんと織華さんは出会っています。お互い気がついですれ違った程度ですけど」

隆道「ジマ！？」

日澄「貴方、動揺しすぎ……まぁ、そんな複線があって、あの話しは回想編として、話しがある程度進んだところで入れようと考えていたそうよ」

隆道「そうなのか……じゃぁ、最終的にエンディングはどうなるんだ？」

日澄「その辺りは幾つか案があったようね。一つは妹さんと織華が一緒に死んで、隆道が普通の人になって私と一緒に真織市を出て行くエンド。もう一つは妹さんが隆道の中に戻って、さらに織華が生き残って神那荘の住人になって、また日常が続くエンド」

隆道「あれ？　織華が俺の彼女になるという選択は？」

キーア「そのころには……日澄と……デキてるって、設定らしい……ぐはっ（吐血）」

日澄「……よほど納得できて無いんでしょうね。まぁ、私も今の段階でコイツの彼女になるなんて考えられないけど」

隆道「たしかにな。ちなみにキーアは『かませ犬』と作者の設定資料では書いてある」

キーア「ぶぼぁ！！　あぁ……もう眠いよパトラッシュ……がく」

日澄「一応ご愁傷様と言っておきましょう。さて、人物設定の話しが出てきたところで、その辺りのネタバレも話しましょうか」

隆道「だな。とはいっても、作者の設定資料の一部を紹介するだけにしよう。さくさく進めたいし」

世界「全員分紹介するつもりはないんだけどね」

萩島隆道（はぎしまたかみち）

●地下鉄の悪魔事件の時に日澄をかばって重症になる。それがきっかけでその後、日澄を意識するようになる。
●本人は自覚は無いが本当は異能者。妹がストッパーになっているが、その片鱗が本編中で見え隠れ。最終編で覚醒。
●妹のことは恨んでいるが、嫌ってはいない。実はシスコン。
●織華とは殴り合いの中で友情が芽生える。お互いウマがあったようである。

桜河キーア（さくらがわ）

●ストーカーでかませ犬。
●隆道に惚れた理由は、初めて心が読めなかった存在だから。
●隆道と日澄が結ばれても、愛人の座を狙っている。

伊頭巻日澄

●織華のクローン体と言うのは嘘。実際は[redacted]を複製していた際の成長過程で出来た結果、織華に似たというだけ。
●王道のツンデレにはしたくないなー
●濃い面子が多くて影が薄くなりそう……

穂邑直純＆夏海信子

●友人役としていろいろ体を張る人。
●VS対異能者捕縛機関編で活躍予定。
●結局なんだかんだで、二人は付き合うことに。その辺りのエピソードも作れたらな……

雪風

●イズマキの実験体。人間の思考を持った狼。狼の身体のため人語は話せないが、相手の言葉は理解できる。
●イケメンの男好き。

秋村時矢＆東雲丹野

●学園生活でいろいろ出てくる
●日常生活でいろいろ出てくる

黒姫

●本名『代樹雫（しろきしずく）』
●シモネタ担当

萩島世界（はぎしませかい）

●とある◆◆◆◆に出会ったことで自身もソレを目指すようになる。
●隆道に誤解されているが、隆道を殺した理由は×から■■が出現しかけていたため。でも、それがほしかったのも事実。
●ラスボス

世界「まぁ、紹介できるのはこんなものかな？」
日澄「なんか一部、いろいろ酷いんだけど……」
隆道「それにネタバレなのに隠している部分があるんだが」
世界「そこは、ちょっと話せない事情があるの」
隆道「本当かよ、ただ考えて無いだけじゃ――」
世界「兄さん（にっこり）」
隆道「はい、すみません」
日澄「それと、本編に出てきているし、主要となる人物の説明はどうするの？」

隆道「あぁ、イズマキの棟長とか、地下鉄の狂人とかか」

世界「棟長は黒幕で、狂人は中ボスね」

隆道「あっさりと、でもわかりずらい説明！」

世界「あと、タイトルのＡｎｔｉ　Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ａｎｔｉは、私の異能名『悪夢を払い見せる者（アンチ・ナイトメア・アンチ）』にかかっていて、物語の核心を意味していたり」

■◇■◇■

隆道「さて、そろそろこの座談会もお開きの時間だ」

世界「まったく、せっかくの処女作なのに、こんな形で終わらすなんて最悪ね」

日澄「それはいまさら言ったってしょうがないことよ。私たちの世界はここで終わり。ソレは決定したことなの」

キーア「今後、この物語の続きが出ることはありませんが、この物語で使われる世界設定は実は――」

隆道「はいはい、思わせぶりは無しにしような。それでは足早となったが、これにてネタバレの座談会は終りだ」

キーア「本編を読んでくださった多くの方々、本当にありがとうございます」

日澄「今後、別の作品ではこのような打ち切りが無いように、出した作品は何が何でも完結させせたいと思います」

隆道「それでは長々とお付き合いいただきましたが、Ａｎｔｉ　Ｎｉｇｈｔｍａｒｅ　Ａｎｔｉはコレにて終了です。今までこの作品を呼んでくださった皆様、本当に――」

全員「ありがとうございましたー！！！！！！」

いきなりですが、最終回です（後書き）

本当に、読者の皆様今までありがとうございました。そして同時に申し訳ございません。

事情は作中で書かれたことだけでは無いのですが、どうしてもこの話しを書けなくなってしまったため、この様な強引な手段を取らしていただきました。

長々となりましたが、これに懲りず、どうか別の作品の方も呼んでいただけると幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1256o/

Anti Nightmare Anti

2010年10月30日07時55分発行